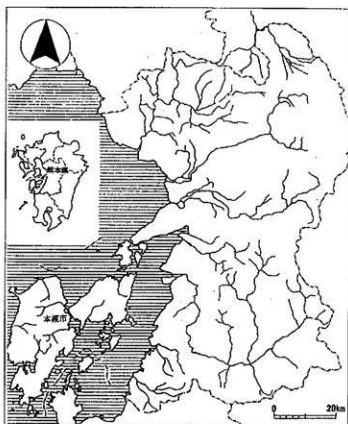


菅原遺跡

(平成6年度 市道井籠～箱の水線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)



1996年3月

熊本県本渡市教育委員会

十字刻印石出土土地

菅原遺跡発掘調査区域

菅原遺跡範囲

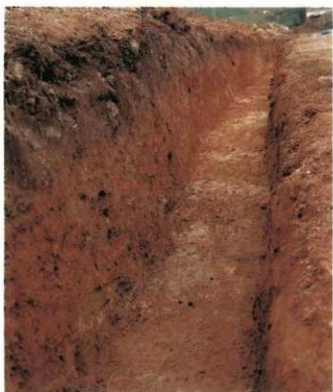
箱の水遺跡

丸尾ヶ丘遺跡





遺跡近景



遺跡土層



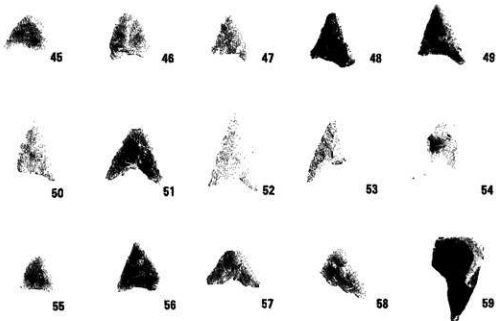
石器(削器)



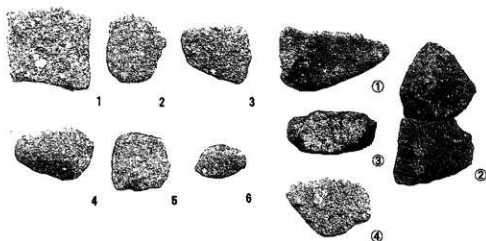
縄文時代の石器（礫器） 1.2.3



縄文時代の石器（祭礼石器） 4.5



縄文時代の石器（石鏃）45, 46, 47, 48, 49
 (石鏃) 59
 50, 51, 52, 53, 54
 55, 56, 57, 58



土器 縄文時代の土器 1, 2, 3, 4, 5, 6 その他の土器 ①②③④

序 文

私たちの本渡市には、数多くの文化財が点在しています。これらの文化財を保護・保存することは、現在に生きる人々の責務でもあります。

このたび、市道井籠～箱の水線道路改良工事にともない、区域内のうち用地買収が終了している昔原地区の埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。調査につきましては、熊本県教育庁文化課の指導を受け、事業の進捗にあわせて、本渡市教育委員会が調査いたしております。

発掘調査は、予想を越える出土遺物と、遺構が確認されるなかで実施されました。炎天下の遺跡からは、石鏃、叩き石、石皿などの多数の石器、土器片や、当時の生活を示す遺構が確認され、縄文時代の人々の営みを想像させてくれました。天草における、埋蔵文化財調査のなかで、本遺跡出土の石器や遺構は大変貴重な発見であります。

本書が学術研究に利用されますと共に、埋蔵文化財に対する理解に役立てられますなら幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり貴重な助言を賜りました諸先生、ご協力頂きました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成8年3月29日

本 渡 市 教 育 委 員 会
教育長 小田原 満

例 言

- 1、本書は、市道井籠～箱の水線道路改良工事に伴い発掘調査を実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、本発掘調査は、本渡市（担当・建設課）と本渡市教育委員会（担当・文化課）が締結した、埋蔵文化財発掘調査委託協定書により実施した。
- 3、本件業務のうち地形測量・遺構・遺物実測の業務は、第三者に委託した。
- 4、調査は熊本県教育庁文化課の指導を受けて、本渡市教育委員会が実施した。
- 5、本書は、本渡市教育委員会文化課平田豊弘が執筆・編集した。

目 次

口 絵	菅原遺跡航空写真	1
	菅原遺跡近景・土層・石器(削器)	3
	縄文時代の石器(鏢器)(祭礼石器)	5
	縄文時代の石器(石鏃) 縄文時代の土器・その他の土器	7
序 文		
例 言		
目 次		
第1章	はじめに	1
1.	調査にいたる経過	1
2.	調査組織	2
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	3
1.	遺跡の位置	3
2.	遺跡の歴史的環境	3
第3章	遺跡の概要と層位	6
1.	遺跡の概要	6
2.	遺跡の層位	6
第4章	遺構	19
1.	遺構の概要	19
第5章	遺物	21
	—土器—	
1.	縄文時代の土器	21
2.	その他の土器	21
	—石器—	
1.	石器(削器)	22
2.	縄文時代の石器	23
第6章	まとめ	50
1.	菅原遺跡調査成果	50
(1)	遺構について	50
(2)	土器について	50
(3)	石器について	50
2.	遺跡の範囲と年代	51
3.	菅原遺跡と丸尾ヶ丘遺跡	52
4.	むすび	56
	菅原遺跡テフラ分析調査	57
	報告書抄録	61
	図版	63
	あとがき	77

テフラ分析結果目次

① 菅原遺跡東壁面の火山ガラス比分析結果	60
② 菅原遺跡東壁面の重鉱物組成分析結果	60
③ 菅原遺跡の屈折率測定結果	60
④ 菅原遺跡東壁面の土層柱状図	60
⑤ 菅原遺跡東壁面のテフラ組成ダイヤグラム	60

挿 図 目 次

第1図 本渡市内旧石器時代・縄文時代遺跡分布地図	4
第2図 菅原遺跡にかかる井籠～箱の水線道路改良工事路線図	5
第3図 菅原遺跡Aトレンチ南西壁土層図	6
第4図 菅原遺跡地形測量図	7・8
第5図 菅原遺跡遺物分布図①②③④	9・10
第6図 菅原遺跡土層断面図①②③	11～14
第7図 菅原遺跡遺構図	15～18
第8図 出土遺物実測図 縄文時代の土器・その他の土器	21
第9図 天草の旧石器時代遺跡分布図	22
第10図 出土遺物実測図 石器(削器)	22
第11図 出土遺物実測図 石器(裸器)	31
第12図 出土遺物実測図 石器(祭礼石器)(動物の齧り痕のある石器)	32
第13図 出土遺物実測図 石器(磨石)	33
第14図 出土遺物実測図 石器(磨石)	34
第15図 出土遺物実測図 石器(磨石)(磨石・台石)	35
第16図 出土遺物実測図 石器(磨石・敲石)	36
第17図 出土遺物実測図 石器(磨石・敲石)(敲石)	37
第18図 出土遺物実測図 石器(台石)	38
第19図 出土遺物実測図 石器(台石)	39
第20図 出土遺物実測図 石器(石皿)	40
第21図 出土遺物実測図 石器(石皿)	41
第22図 出土遺物実測図 石器(石皿)	42
第23図 出土遺物実測図 石器(凹石)(石斧)	43
第24図 出土遺物実測図 石器(石鏃)(石錐)	44
第25図 出土遺物実測図 石器(石核)(剥片石器)	45
第26図 出土遺物実測図 石器(その他の石器)	46
第27図 出土遺物実測図 石器(不明な剥片)	47

第28図	出土遺物実測図 石器（不明な剥片）	48
第29図	出土遺物実測図 石器（不明な礫器）	49
第30図	菅原遺跡と周辺遺跡分布図	51
第31図	丸尾ヶ丘遺跡出土遺物実測図 土器・石器	53
第32図	丸尾ヶ丘遺跡出土遺物実測図 石器	54
第33図	丸尾ヶ丘遺跡出土遺物実測図 石器	55

挿 表 目 次

第1表	本渡市内旧石器時代・縄文時代遺跡地名表	4
第2表	天草の旧石器時代遺跡地名表	22
第3表	石器（削器）観察表	29
第4表	縄文時代の石器分類表	29・30
第5表	縄文時代の石器器種別円グラフ	50
第6表	縄文時代の石器石材別円グラフ	50

図 版 目 次

第1図版	菅原遺跡遠景・表土はぎ作業	65
第2図版	発掘状況・1区土層観察状況	66
第3図版	2区土層観察状況・発掘終了状況	67
第4図版	遺構SX1・遺構SX3	68
第5図版	遺構SX4・遺構SX5	69
第6図版	遺構SX6・遺構SX7	70
第7図版	遺構SX8・遺構SX9, 10	71
第8図版	遺構SX11, 12, 13・遺構SX12	72
第9図版	1区褐色泥礫粘土層状況・2区礫層確認状況 礫検出状況・遺物出土状況	73
第10図版	縄文時代の石器（動物の齧り痕のある石器）（磨石） （磨石・台石）（磨石・敲石）	74
第11図版	縄文時代の石器（敲石）（台石）（石皿）	75
第12図版	縄文時代の石器（石皿）（凹石）（石核）（石斧） （剥片石器）（その他の石器）	76

第1章 はじめに

1 調査にいたる経過

天草は、熊本県南西部に位置する大小120余の島々よりなり、東は不知火海（八代海）を隔てて八代平野と、北は高原湾を隔てて高原半島と、南は鹿児島県の長島や獅子島と接している。島の総面積は、880㎢で2市13町に行政区分されており、¹⁾約154,000人の人々が生活している。気候は温暖で、植生は暖帯の照葉樹林帯であるが、低山性の丘陵と海が接する地形は、平地に乏しく、大きな河川は発達していない。本渡市は、この天草群島の中で最大の天草下島と二番目に大きい上島にまたがって広がる行政体で、天草における産業、経済、交通、文化の中心的役割を担う中核都市である。

現在、本渡市における交通体系整備が促進されつつあるが、その一環として市道・井龍～箱の水線の道路改良工事が計画された。これまで、工事予定区域内において、土器片、石器などが確認されており遺跡の存在が指摘されていた。このため、工事の進捗に合わせて随時文化財調査を実施するものとし、平成6年度は本渡市本渡町大字本戸馬場字菅原1706-1に所在する菅原遺跡の発掘調査を実施した。

平成5年5月19日 井龍～箱の水線道路改良工事に伴う文化財の事前調査について（依頼）

5年6月7日 工事予定区域の箱の水地区を踏査〔遺物分布範囲確認〕

5年11月29日 工事予定区域の箱の水地区を試掘調査〔調査区域確認〕

6年1月21日 平成6年度埋蔵文化財発掘調査実施計画等の提出について（依頼）

6年1月24日 平成6年度井龍～箱の水線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査実施計画等について（回答）

6年3月23日 埋蔵文化財発掘調査に係る委託協定書について（協議）

6年4月1日 埋蔵文化財発掘調査委託協定書を締結

6年4月1日 埋蔵文化財発掘調査について文化財保護法に基づく通知

6年5月17日 1工区調査開始

6年5月27日 熊本県教育庁文化課松本健郎係長による調査指導

6年6月6日 福岡市教育委員会文化財部山崎純男係長による遺跡確認

6年7月13日 発掘調査業務中間報告と業務調整〔建設課・文化課〕

6年9月1日 2工区調査開始

6年10月11日 福岡市教育委員会文化財部山崎純男係長による遺物確認

6年10月17日 現場発掘調査業務完了

7年1月7日 遺物洗浄・ナンバーリング完了

7年1月10日 埋蔵物発見届け提出

7年2月28日 埋蔵文化財発掘調査委託協定変更書を締結

7年3月31日 菅原遺跡発掘調査概要報告書提出

7年8月3日 出土遺物実測図・製図作成委託契約

7年11月30日 出土遺物実測・製図の成果品納入

7年12月22日 出土文化財譲与の申請

8年3月29日 菅原遺跡発掘調査報告書発行

2 調査組織

菅原遺跡の発掘調査は、熊本県教育庁文化課の指導のもと、本遺跡で遺物を表面採集されている福岡市教育委員会文化財部山崎純男氏、本渡市文化財保護委員黒木雄二氏の教示を受け、本渡市教育委員会が実施した。発掘調査については、本渡市（担当・建設課）と本渡市教育委員会（担当・文化課）の間に埋蔵文化財発掘調査委託協定書を締結し、これに基づき調査を実施した。

事業名称 市道井籠～箱の水線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
 遺跡名称 菅原遺跡
 調査面積 1,250 m²（発掘面積・780m²）

一 組織

建設課 課長 (前)佐藤和十三 (現)山崎末雄
 庶務係 米田 稔 平山イツミ 原田昌治 (前)廣瀬愛子
 工務一係 山下秀文 池田 稔 横山茂樹 丸林眞吾 堤内敏喜
 (前)山岡忠文

教育委員会

教育長 小田原満
 文化課 課長 山本忠雄
 文化財係 森山滝夫 平田豊弘（調査担当）

作業員 井上梅子 田中フクエ 樋口トミエ 福島ミツエ 福島シゲコ
 花井智子 梅本千鶴子 城下ツタエ 鳥羽瀬ゆりこ
 遺物洗浄 山下宗親 松原会紀 平田豊子

地形測量 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店
 遺構実測 ◇ 平田豊弘
 遺物実測 ◇ 山下宗親
 テフラ分析 早田 勉（古環境研究所）

調査指導 熊本県教育庁文化課 島津義昭 松本健郎 古森政次 高谷和生 木崎康弘
 山下義濟
 熊本県文化財保護指導員 明瀬忠幸 岡部親司 高田尊徳
 本渡市文化財保護委員 金沢武昌 仁田長政 木山惟彦 黒木雄二 酒井邦子
 天草考古の会 平岡勝昭 鶴田倉造 松田浩平
 熊本大学 高橋俊正（石材判定）
 福岡市教育委員会 山崎純男

調査協力 大日本清掃有限会社

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1 遺跡の位置

本渡市は、九州西方の東シナ海、有明海および不知火海に囲まれた天草諸島の中央に位置する。市域は、本渡瀬戸海峡を挟んで天草上島の西部と天草下島の東部に広がる。総面積は、144.60km²で天草諸島874.93km²のおよそ6分の1にあたる。市の東は、上島の志柿町・下浦町で東部の標高250m程の低山地を境界として天草郡有明町および栢本町と接している。西は下島中央部の柱岳、角山、矢筈岳などの標高500m前後の低山性の山地を境界として苓北町および天草町・河浦町、南は大宮地山稜で新和町、北は標高100m以下の低い丘陵で五和町と接する。天草の地形は、ほとんどが低山性山地と丘陵で、山がすぐに海に迫るリアス式海岸であり、河川に沿って小平野が海沿いに点在している。市内には、広瀬川、町山口川、亀川、方原川、小手川、江川などの小さい河川が流れているが、この河川に沿って形成された小平野がそれぞれ独立した村落を組織してきたと考えられる。遺跡の立地と分布も、この様な地形に影響を受けて発達したといえる。

菅原遺跡は、熊本県本渡市本渡町大字本戸馬場字菅原1706-1に所在する。遺跡は、広瀬川の中流域の市街地から2kmほど離れた西から東にかけて延びる低山地の谷間に位置し、標高30m程の丘陵（段丘）の西向きの小斜面に所在する。遺跡の南・西・北は温暖樹木によって雑木林が形成されており、東側の谷間には水田が広がり丸尾ヶ丘の丘陵へとつづいている（口絵、第1図版）。

2 遺跡の歴史的環境

本渡市では、旧石器時代より連続と人々の生活が営まれている。この時代の遺跡としては、丸尾ヶ丘遺跡、妻の鼻遺跡の2遺跡が確認されているが、いずれも表面採集の遺物による確認であり、詳細については不明である。天草内においても6遺跡が確認されているが、発掘調査は実施されていない。

菅原遺跡周辺で、関連が推測される遺跡として丸尾ヶ丘遺跡がある。本遺跡からの遺物について山崎純男氏は、²¹「細石核があることを20数年前に確認していたが、現在所在不明である。記憶では、腰岳産の黒曜石を利用した円錐形の細石核であった。」と記している。また、松田浩平氏の採集遺物には、²²チャート石材の剥片で風化が著しくローリングを受けている遺物がある。金沢武昌氏所蔵の石器は、菅原遺跡出土の石器と類似する礫石器が確認されている。この器種の石器は、これまで市内の他遺跡からの出土はない。採集されている土器は、縄文時代の押型文土器があり、石器・土器の状態と採集者の話より、菅原遺跡の遺物包含層と同質の赤褐色ローム層から出土したものであろうと推測される。この両遺跡が距離的にも隣接していることは、周辺地域の旧石器時代の研究遺跡としても注目される。他には、市内亀場町の亀川河口左岸に位置する遺跡として、妻の鼻遺跡が知られている。地式板石積石室墓で有名な遺跡であるが、わずかながら、縄文時代・旧石器時代の遺物もみられる。

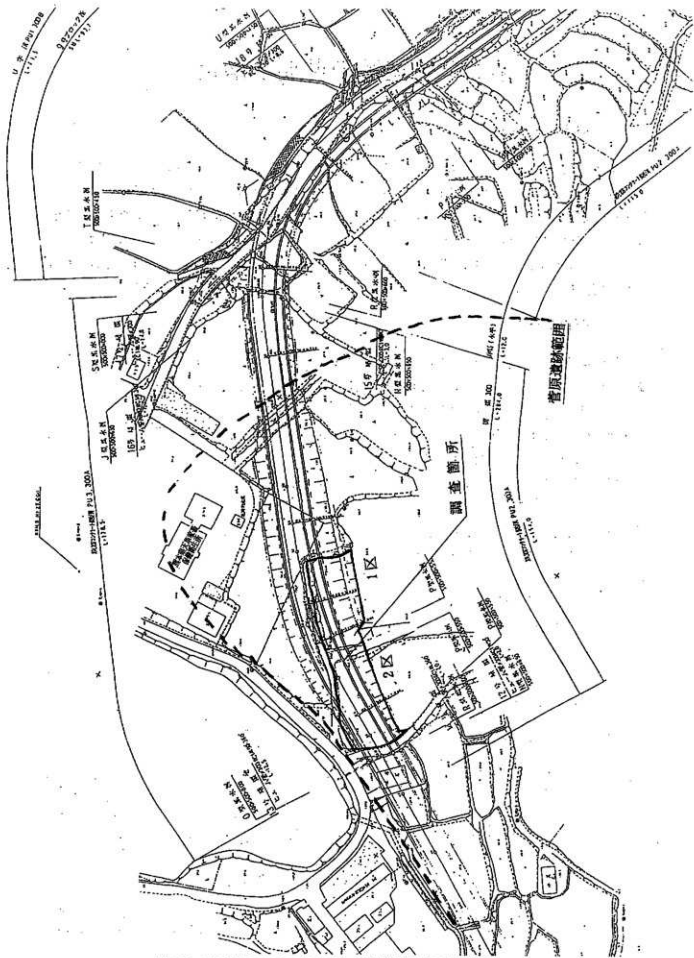
縄文時代になると遺跡数は増し、市内では現在⁴52遺跡が確認されている。遺跡の分布を見ると、海岸まで迫った山地を流れる小河川流域の段丘上に分布する遺跡群と、内湾した海岸部の平地や陸地から落ち込んだ海底に分布する遺跡群に大別される。天草島内においても、この分布のパターンは一致している。本渡市内において、特に広瀬川流域と町山口川流域には、遺跡の集中が見られる。この海岸周辺には、大矢遺跡、浜崎貝塚、浜崎遺跡、牛の首遺跡がある。段丘上の遺跡としては、本泉A・B遺跡、一ノ瀬遺跡、栢の原遺跡、上流に新休遺跡、引地遺跡、前原遺跡、福岡遺跡などが点在している（第1図、第1表）。



第1表 本渡市旧石器時代・縄文時代遺跡地名表

遺跡名(時代)	遺跡名(時代)	遺跡名(時代)
1. 菅原遺跡 (縄)	21. 緑山遺跡 (縄・中世)	41. 立橋B遺跡 (縄)
2. 丸尾ヶ丘遺跡 (旧・縄・古)	22. 大河内遺跡 (縄)	42. 南古舞遺跡 (旧・古)
3. 箱の水遺跡 (縄・弥)	23. 中津A遺跡 (縄)	43. 西の木遺跡 (旧・縄)
4. 中の音遺跡 (縄)	24. 神野B遺跡 (縄)	44. 古木遺跡 (縄)
5. 浜崎遺跡 (縄・古代・中世)	25. 美ノ鼻遺跡 (旧・縄・古)	45. 長沼A遺跡 (縄)
6. 浜崎貝塚 (縄)	26. 亀川中学校遺跡 (縄・弥)	46. 長沼B遺跡 (縄)
7. 入矢遺跡 (縄・古代・中世)	27. 宇土A遺跡 (縄・中世)	47. 大谷遺跡 (縄)
8. 茂木遺跡 (縄・中世)	28. 宇土B遺跡 (縄・中世)	48. 大谷海岸遺跡 (縄)
9. 赤羽岡原遺跡 (縄・古代)	29. 藤北遺跡 (縄・中世)	49. 日高野遺跡 (縄・中世)
10. 本泉A遺跡 (縄)	30. 藤の瀬遺跡 (縄・中世)	50. 仲の瀬遺跡 (縄・古代)
11. 本泉B遺跡 (縄)	31. 新田塚遺跡 (縄・古)	51. 船場遺跡 (縄・古代)
12. 一の岡遺跡 (縄)	32. 中原遺跡 (縄)	52. 金沢遺跡 (縄)
13. 砂の原遺跡 (縄)	33. 松田A遺跡 (縄・中世)	
14. 野休遺跡 (縄)	34. 松田B遺跡 (縄・中世)	
15. 引地遺跡 (縄)	35. 鴨子崎A遺跡 (縄・古代)	
16. 前原遺跡 (縄)	36. 鴨子崎B遺跡 (縄・弥・古)	
17. 福岡遺跡 (縄)	37. 鴨子崎C遺跡 (縄・弥・古)	
18. 今ヶ丘白遺跡 (縄)	38. 鴨子崎D遺跡 (縄・古・古代)	
19. 山の仁遺跡 (縄)	39. 立木A遺跡 (縄)	
20. 中山口丸尾遺跡 (縄・中世)	40. 立木A遺跡 (縄・中世)	
		旧石器時代遺跡
		A菅原遺跡
		B丸尾ヶ丘遺跡
		C美ノ鼻遺跡
		? 箱の水遺跡

第1図 本渡市旧石器時代・縄文時代遺跡分布図



第2図 菅原遺跡にかかる井龍～箱の水線道路改良工事路線図

第3章 遺跡の概要と層位

1 遺跡の概要

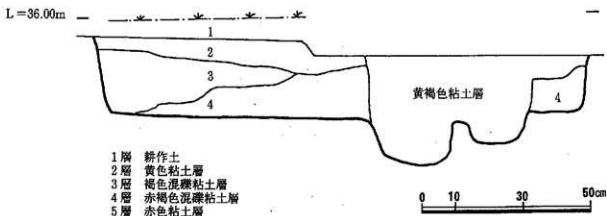
菅原遺跡は、標高30m程の丘陵（段丘）の斜面に発達した遺跡である。調査は、その尾根筋を東～西に横断する市道改良工事区域を実施した。遺跡は、丘陵面6,000㎡の範囲と推定されるが、すでに熊本県天草家畜保健衛生所により1,000㎡ほどが削平されており、今回の工事は遺跡中心部を横断する形となる。調査区域は牧草地で、上部の畑は表土が流失しているが粘土層（包含層）の残存状況はよい。下部の畑は、流れ込んだ表土が厚く堆積するが、南西隅においては粘土層（包含層）の削平がみられる。なお、調査の行程上、調査区を1区、2区と区分した（第2図、第4図）。南西隅には、菅原B遺跡が位置する。

2 遺跡の層位

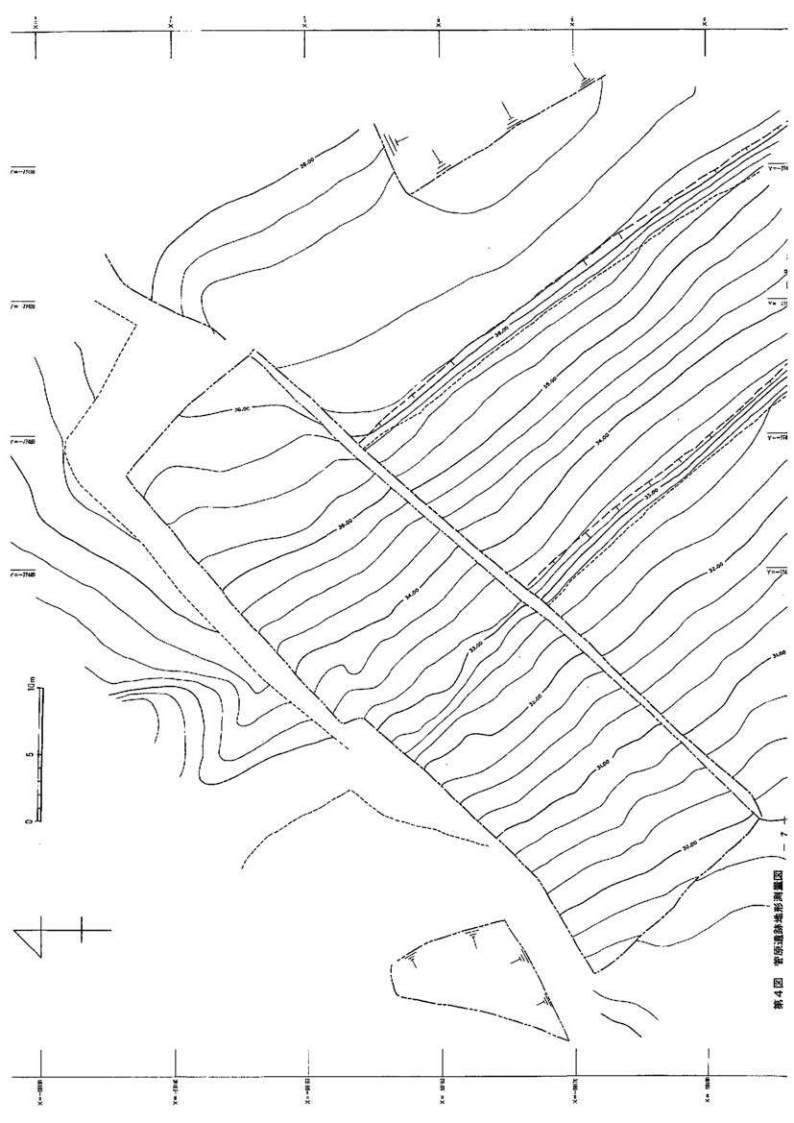
土層は調査地点によって若干異なるが、典型的な層序は下記に示すとおりである。斜面への堆積層であるため変化があるが、表土・茶色粘土層・赤褐色粘土層・赤色混礫粘土層・赤色粘土層・黄色粘土層・白色粘土層を基本とする。（第3図、第6図、第2図版、第3図版）

- 第1層 茶灰色粘土質土層、厚さ5cm～10cmで現在の畑の耕作土である。牧草を作付けし、20年程前に、整地している箇所もある。
- 第2層 茶色粘土層で、上面では近代遺物が出土する。厚さ2cm～5cm程で、地点によっては堆積が見られない箇所がある。
- 第3層 褐色混礫粘土層で、遺物包含層である。厚さ5cm～10cmで1工区での残りがよい。
- 第4層 赤色混礫粘土層で、遺物包含層である。厚さ10cm～15cmで1工区での残りがよい。
- 第5層 赤色粘土層
- 第6層 黄色粘土層
- 第7層 白色粘土層

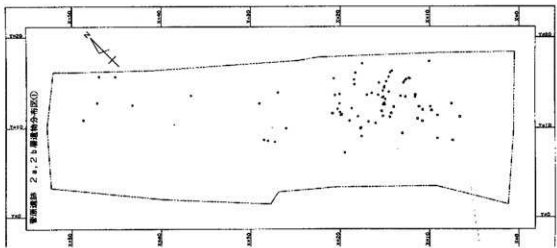
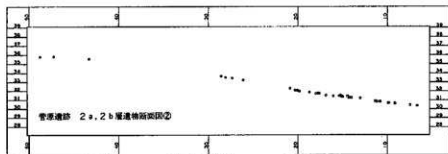
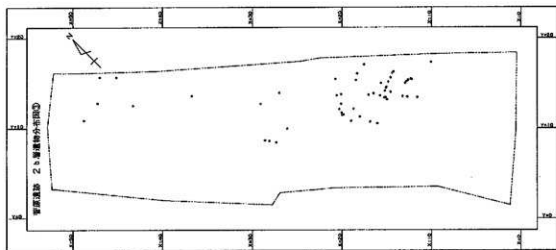
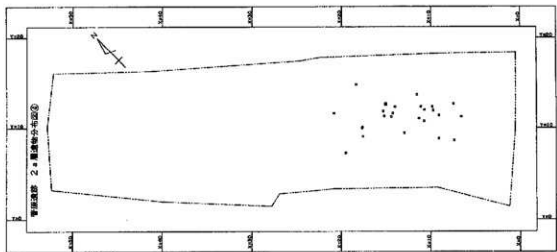
以上が基本的な層序関係である。各層は、斜面を流出しながら堆積したものと考えられる。このため、堆積するすが混在する地点もある。



第3図 菅原遺跡Aトレンチ南西壁土層図



第4图 平野部地形断面图



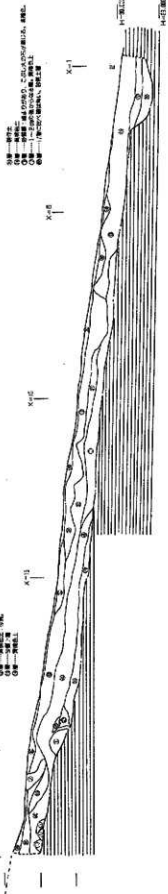


H-77断面

H-78断面



- (1) 礫石層
- (2) 砂層
- (3) 粘土層
- (4) 砂質粘土層
- (5) 礫石層
- (6) 砂層
- (7) 粘土層
- (8) 砂質粘土層
- (9) 礫石層
- (10) 砂層
- (11) 粘土層
- (12) 砂質粘土層
- (13) 礫石層
- (14) 砂層
- (15) 粘土層
- (16) 砂質粘土層
- (17) 礫石層
- (18) 砂層
- (19) 粘土層
- (20) 砂質粘土層



- (1) 礫石層
- (2) 砂層
- (3) 粘土層
- (4) 砂質粘土層
- (5) 礫石層
- (6) 砂層
- (7) 粘土層
- (8) 砂質粘土層
- (9) 礫石層
- (10) 砂層
- (11) 粘土層
- (12) 砂質粘土層
- (13) 礫石層
- (14) 砂層
- (15) 粘土層
- (16) 砂質粘土層
- (17) 礫石層
- (18) 砂層
- (19) 粘土層
- (20) 砂質粘土層

H-79断面

H-80断面



- (1) 礫石層
- (2) 砂層
- (3) 粘土層
- (4) 砂質粘土層
- (5) 礫石層
- (6) 砂層
- (7) 粘土層
- (8) 砂質粘土層
- (9) 礫石層
- (10) 砂層
- (11) 粘土層
- (12) 砂質粘土層
- (13) 礫石層
- (14) 砂層
- (15) 粘土層
- (16) 砂質粘土層
- (17) 礫石層
- (18) 砂層
- (19) 粘土層
- (20) 砂質粘土層

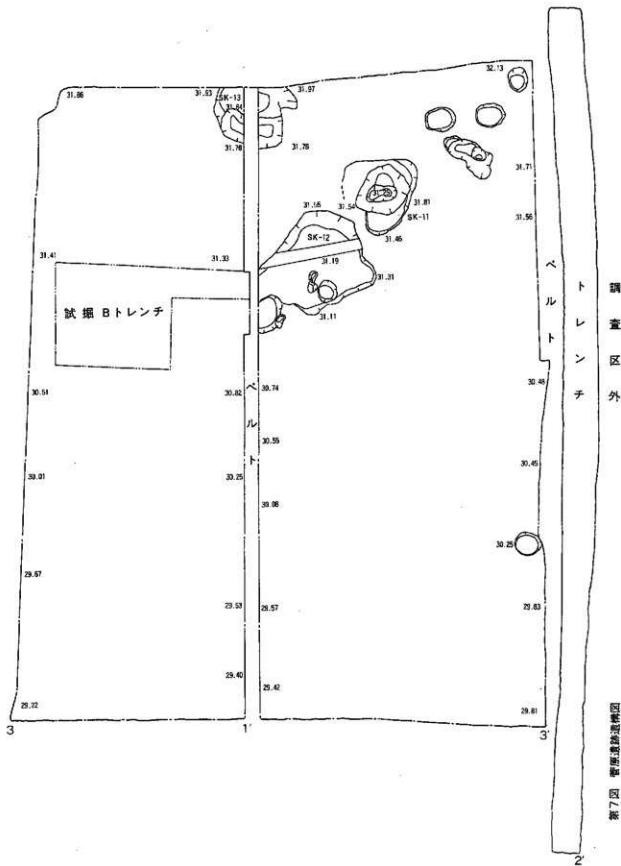
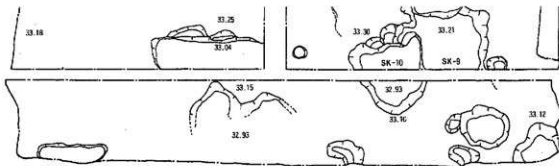
H-81断面

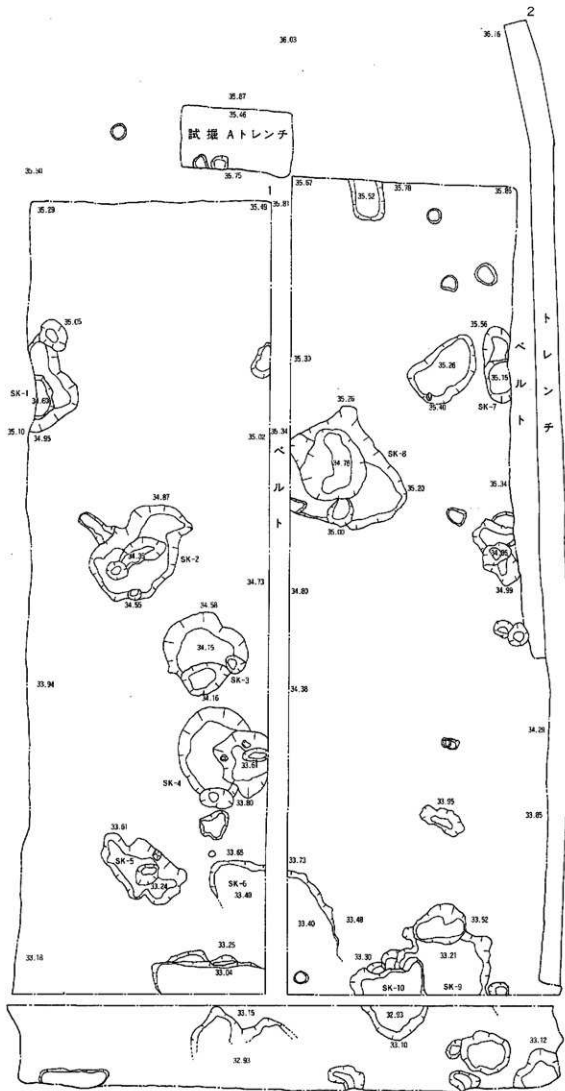
H-82断面

H-83断面

H-84断面







試掘 Aトレンチ

調査区外

2

36.03

36.16

35.87

35.46

35.75

35.30

35.23

35.49

35.57

35.52

35.70

35.85

SK-1

35.15

34.69

35.10

34.95

34.87

SK-2

34.56

34.75

SK-3

34.16

SK-4

33.81

SK-5

33.24

SK-6

33.40

33.25

33.14

35.33

35.25

SK-6

34.71

SK-6

35.23

35.00

34.73

SK-6

34.83

34.38

33.73

33.40

33.40

33.30

SK-10

33.15

32.91

ト

ベ

ル

ン

チ

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト
ベ
ル
ン
チ
ト

34.25

33.55

33.25

33.52

33.21

33.12

32.91

32.91

第4章 遺構

1 遺構の概要

菅原遺跡からは、不定形の土壌が13基検出されている。土壌の、形状や大きさにはバラツキがあり用途についても不明な点が多い。発掘は、丘陵の南西～北東方向に16m、北西～南西方向に49mの道路工事区域にそった長方形の780㎡の範囲であったが、遺構は斜面中程から頂上にかけて分布する。調査区の下地域は、礫層下位の褐色粘土層、黄色粘土層が堆積し、礫層上位の赤褐色粘土層は削平されているため、この地域での遺構の存在自体については不明である。遺構は、赤褐色粘土層に不明瞭に掘り込むため、土壌の検出・確認作業は困難であった。埋土は、茶褐色粘土、黄色粘土、赤色粘土が遺構内に流れ込む状況にあった。これは、台地の斜面に遺構が立地し、基盤となる赤褐色粘土が晴天時には土埃となるほどまで風化し、雨天時には斜面を流れて遺構に堆積するためである。実際に発掘時においても、風化と堆積が繰り返され、遺構の埋没する過程を観察できた。以下、遺構の状況を説明する（第7図、第4図版～第8図版）。

SX1

SX1は、標高35.00mのA-2区北西隅で検出した掘り込みである。3.00m×1.20m(未確定)の菱形に近い楕円形を呈する掘り込みで、深さ40cmの浅鉢状の土壌である。遺構の埋土は、茶色粘土、黄色粘土、褐色粘土が流れ込むように堆積する。壁面の黄色粘土層からは縄文土器片が、褐色粘土層からは石器が出土する。遺構の用途は、北西側が崖面となるため規模が未確認であるが、住居跡の可能性もある。

SX2

SX2は、標高34.50mのA-3区北東隅で検出した掘り込みである。3.15m×2.00mの歪な長方形を呈する掘り込みで、深さ40cmのすり鉢状の土壌である。遺物の出土は無く、遺構の用途は不明である。

SX3

SX3は、標高34.30mのA-3区東側で検出した掘り込みである。2.00m×2.00mの歪な円形を呈する掘り込みで、深さ50cmの土壌である。遺構の埋土は、黄色粘土が薄く輪郭を表していたが、褐色粘土と混在し、土壌の確認が困難であった。遺構の用途は、不明である。

SX4

SX4は、標高34.00mのA-3区北側隅で検出した掘り込みである。SX3と隣接し、2.60m×2.40mの歪な円形を呈する掘り込みで、深さ50cmの土壌である。遺構内は、深さ20cm程落ち込んで平坦となり、東南部が更に30cm落ち込む。遺構の埋土は、黄色粘土が流れ込み石器が出土し、下位の褐色粘土や青白色粘土が堆積する。やや深い掘り込みをしているが、遺構の用途は不明である。

SX5

SX5は、標高33.50mのA-3区南西側隅で検出した掘り込みである。SX4と隣接し、2.40m×1.40mの不定形で歪な形状を呈する掘り込みで、深さ35cmの土壌である。遺構内は、北東側は25cm程に掘り込むが、南西側は10程の掘り込みとなっている。斜面のため、南西側は削平を受けている。遺物の出土は無く、遺構の用途は不明である。

SX6

SX6は、標高33.60mのA-3区南側隅で検出した掘り込みで、南西側が大きく削平され規模が確認できない状況である。残存部で、2.50m×2.00mの長方形を呈する掘り込みと推定される。遺構の埋土は、茶色粘土、黄色粘土、褐色粘土がブロックとして堆積し、赤褐色粘土が流れ込むように堆積して

いる。特に、床面は濃赤褐色粘土であり、南西側は下位（地山）の黄白色粘土が竊模様に広がっている。北東側は、35cm掘り込み平坦面となり南西側も同じ状況であることや、形状より住居跡と推定される。

S X 7

S X 7は、標高35.50mのB-2区東側隅で検出した掘り込みである。2.00m×1.00mの細長い楕円形を呈する掘り込みで、深さ30cmの土壌である。遺構の埋土は、茶色粘土が薄く堆積し下位に褐色粘土が堆積する。遺構の用途は、不明である。隣接して2.00m×1.30m程で、深さ20cm程の楕円形の掘り込みがあるが、遺構として認定するまでには及ばない。

S X 8

S X 8は、標高35.20mのB-2区西側隅で検出した掘り込みである。3.30m×3.05mの歪な正方形を呈する掘り込みで、深さ50cmの土壌である。遺構の埋土は、茶色粘土、黄色粘土、褐色粘土が堆積し、中央部に厚く赤褐色粘土が堆積する。床面は、やや凹凸しており、柱穴状の掘り込みも観察されるが、明確ではない。大形の土壌で、褐色粘土層より石器が出土する。形状より、住居跡の可能性もある。

S X 9

S X 9は、標高33.50mのB-4区北東側で検出した掘り込みである。北東側に一部の掘り込み跡が残存するが、大半が削平されている。北東側において、35cm程の掘り込み遺構の輪郭が確認され、床面は平坦である。上位に、茶色粘土に混在し集石の形態であったが、流れ込みによる堆積であった。検出状態は、S X 6と類似し形状より住居跡の可能性もあるが不明である。

S X 10

S X 10は、標高33.30mのB-4区中程でS X 9の北西端部と切り合って検出した掘り込みである。2.00m×2.00mの歪な三角形を呈する掘り込みである。床面は平坦で、上位に、茶色粘土に混在し集石の形態であったが、流れ込みによる堆積であった。なお、S X 6、S X 9、S X 10は隣接する遺構で、南西側を大きく削平されている。

S X 11

S X 11は、標高31.80mのB-4区北側で検出した掘り込みである。2.40m×1.40mの楕円形を呈する掘り込みで、深さ55cmの土壌である。遺構の上位は、茶色粘土が堆積し石器が出土している。下位には、黄色粘土、褐色粘土が堆積する。中央は、特に深く掘り込み黄白色粘土（地山）がある。遺構の用途は、不明である。

S X 12

S X 12は、標高31.30mのB-5区北西側で検出した掘り込みである。2.55m×2.65mの台形状を呈する掘り込みで、深さ30cmの土壌である。遺構の状況は遺跡内では良い部類で、床面と直径50の柱穴1個が観察された。遺構の上位は、茶色粘土が堆積し褐色粘土より石器が出土する。遺構の西側の輪郭は、流れ込んだ赤褐色粘土と地山の赤褐色粘土の混在のため不鮮明であった。形状より、住居跡の可能性はある。

S X 13

S X 13は、標高31.90mのA-4区・A-5区・B-4区・B-5区の境界坑が中心に位置する遺構である。2.00m×1.50m（未確定）の正方形を呈する掘り込みで、すり鉢状の深さ30cmの土壌である。遺構の上位は、茶色粘土、褐色粘土が堆積する。遺構の用途は、不明である。

菅原遺跡では、礫が集中的に散在して検出されたが、礫の状況から遺構ではない（第9図版）。

第5章 遺物

土器

1 縄文時代の土器

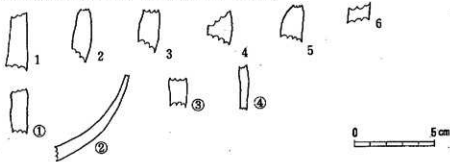
菅原遺跡からは、包含層及び検出遺構より縄文土器が出土している。これらは、小破片で文様も不明であるが、胎土や焼成より縄文時代早期の押型土器に属するものと考えられる。なお、隣接する丸尾ヶ丘遺跡から押型土器が出土しており、土器の状態が類似している。また、出土土層も赤褐色粘土層であり、石器の出土と併せて注目される。以下、土器について説明を加える（口絵、第8図）。

1は、SX1より出土した器表面褐色、内面黒褐色の土器片である。粗い砂粒混じりで大変もろく、焼成は良くない。土器の口縁部付近で、厚さ1.2cmを測る。土器全体の風化が著しく、文様などの詳細については不明である。2は、器表面褐色、内面褐色の土器片である。粗い砂粒混じりでもろく、焼成は良くない。土器の口縁部付近と思われ、厚さ1.12cmを測る。3は、器表面黄茶色、内面黄褐色の土器片である。粗い砂粒混じりでもろく、焼成は良くない。4は、器表面黄茶色、内面灰黒色の土器片である。粗い砂粒混じりでもろく、焼成は良くない。厚さ1.40cmを測る。5は、器表面黄茶色、内面灰黒色の土器片である。砂粒混じりで、焼成は良い。厚さ1.27cmを測る。6は、小破片で器表面黄褐色、内面灰褐色の土器片である。粗い砂粒混じりでもろく、焼成は良くない。この他にも、大豆粒程の土器片が出土しているが、詳細は不明である。

2 その他の土器

遺跡内より、不明の小破片土器が出土している。いずれも風化が著しく、文様や器形を推測できるものはない。胎土や焼成より土器に属するものと考えられ、流れ込みが堆積した土層より出土している。今回の調査では、遺構についての詳細は確認されなかったが、周辺に縄文時代とは別時代の遺跡が存在することが考えられる。以下、その他の土器について説明を加える（口絵、第8図）。

①は、器表面灰黒色、内面黄色茶色の土器片である。砂粒混じりであるが、焼成は良く硬く焼き締まっている。土器の口縁部付近で、厚さ1.1cmを測る。土器全体は、風化が進み文様などの詳細は不明である。②は、器表面茶褐色、内面茶褐色の土器片である。胴部付近と思われ、厚さ9mmである。砂粒混じりで、焼成はややもろい。③は、器表面灰黒色、内面黄色茶色の土器片である。砂粒混じりであるが、焼成は良である。厚さ9.7cmを測る。④は、器表面黄褐色、内面黄褐色の土器片である。胴部付近と思われ、厚さ5.2mmである。砂粒混じりで、焼成はややもろい。



第8図 出土遺物の実測図 縄文時代の土器 1, 2, 3, 4, 5, 6
その他の土器 ①②③④

石器

1 石器 (削器)

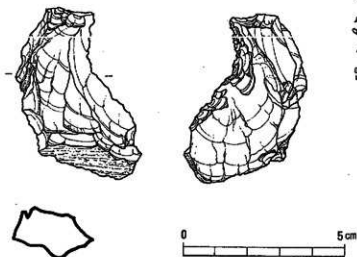
菅原遺跡の出土遺物は、縄文時代の石器が主である。その中にあって、旧石器時代の石器と考えられる遺物がある。石器は、石核の側面に内湾する刃部をつけた削器である。石材は黒色珪質頁岩であり、通常の頁岩よりガラス質で非常に硬い。なお、菅原遺跡の旧石器時代については、層序的に明確ではなく今後の調査過程で把握に努めたい。削器 (口絵、第10図、第3表) は、観察より旧石器時代の石器として考え説明する。

⁴⁾ この石核の最後の剥離は、右面に残された大きな剥離面である。おそらく、その直後に最後の剥離をした際の叩いた点 (打点) の残った石核の側面に内湾するように細かく叩いた剥離を加え、削器の刃部を作りだしている。刃の角度は、 $45^{\circ} \sim 60^{\circ}$ である。この石核の、剥離の際に注目されるのが左面に見られる縦に長い剥離面で、少なくとも3回の剥離が連続して行なわれている。この3回の剥離は、いずれも上端部にある打面から叩かれて剥離されている。打面には、打面と3回の剥離を行ない剥片を取った面 (剥離作業面) とのエッジの部分に細かな剥離が加えられている。この3回の縦長剥片を剥離した後、左面の最も右側に見られるやや幅広い縦長剥片が剥離されるが、このあと剥離されないため打面の調整か、右面の大きな横長の剥離がなされたものと考えられる。いずれにしても、右面の大きな横長の剥離がなされ、削器の刃部が作られている。

天草における旧石器時代の遺跡は、⁵⁾ 現在まで7遺跡が知られている (図9図、第2表)。石材として、黒色珪質頁岩を使用しているの遺物は、下塔尾遺跡の三稜尖頭器、内ノ原遺跡の削器がある。これらは、天草の旧石器時代の石材として注目すべきであろう。また、最近では宮地岳町櫻の木地区においても、黒木雄二氏により遺物が採集されている。地理的にも、内ノ原遺跡・櫻の木遺跡・菅原遺跡は天草下島中央に連なる低山地を結ぶ位置にあたる。



第9図 天草の旧石器時代遺跡分布図



第10図 出土遺物実測図 石器 (削器)

第2表 天草の旧石器時代遺跡地名表

遺 跡 名	所在地
① 菅原遺跡	本渡市
② 丸尾ヶ丘遺跡	本渡市
③ 妻の鼻遺跡	本渡市
④ 上揚遺跡	倉岳町
⑤ 倉岳高校西側遺跡	倉岳町
⑥ 棚底下塔尾遺跡	倉岳町
⑦ 内の原遺跡群 (A・B・C・D・E・F)	牛深市

2 縄文時代の石器

菅原遺跡の出土遺物として、土器と石器がある。土器は、小破片のため文様が明確ではないが、胎土などから縄文時代早期の押型文土器と考えられる。この時期に属する石器は、75点検出された(第4表)。器種ごとの内訳は、礫器3点、祭礼石器2点、動物の齧痕のある石器2点、磨石11点、磨石・台石1点、磨石・敲石5点、敲石3点、台石4点、皿石8点、凹石1点、石斧4点、石鏃14点、石錐1点、剥片石器10点、石核1点、使用痕のある剥片石器11点、その他の石器4点である。石材ごとの内訳は、砂岩36点、黒曜石19点、流紋岩9点、チャート5点、サヌカイト3点、頁岩2点、泥岩1点である。器種ごとに、詳細について説明を加える(口絵、第5図、第11図～第29図、第10図版～第12図版)。

礫器(1, 2, 3)(口絵、第11図)

礫器は、3点出土した。その石器組成に占める割合は4.0%である。石材は全て流紋岩であり、一般に天草の各遺跡から出土する石器の石材と比べ、風化が著しく進んでいる。1は、楕円形の礫の片面をほぼ全面調整する。もう片面は、礫面を残し刃部を細かく調整している。2は、長方形の礫の片面をほぼ全面調整する。大きな剥離面を残し、刃部を調整している。もう片面は、全体に礫面を残すが、刃部の表面が一部剥離している。3は、一部に礫面を残しているが、ほぼ全面を調整している。表面の下側縁と、裏面の左側縁を粗雑であるが刃部として調整している。

祭礼石器(4, 5)(口絵、第12図)

祭礼石器は、2点出土した。その石器組成に占める割合は2.8%である。石材は流紋岩と砂岩であり、顔料が付着している。4は、ベンガラ状の暗橙色の顔料が付着する。全体に細かな不定方向のスリ傷状の線が走る。5は、橙色の顔料が付着する。全体に細かな横方向のスリ傷状の線が走る。2点の石器につくスリ傷状の線は、極めて小さいが、祭礼での使用痕と考えられる。

齧り痕のある石器(6, 7)(第12図、第10図版)

齧り痕のある石器は、2点出土した。その石器組成に占める割合は2.7%で、欠損した石器に齧り痕が観察された。6は、砂岩の礫器の折れたもので、2箇所深く大きな齧り痕が残る。7は、流紋岩の台石の折れたもので、6に比べて浅く小さい齧り痕が残る。両石器とも齧り痕より、リスもしくはネズミなどの小動物の齧った痕跡と考えられる。

磨石(8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18)(第13図～第15図、第10図版)

磨石は、11点出土した。その石器組成に占める割合は15.0%である。石材は全て砂岩であり、形状はバラツキがみられ使用状況より3類に分類される。以下、類ごとに説明を加える。

第1類(8, 9, 10)

1類に属するものは、使用面が1面の石器で形状にはバラツキがみられる。8は、偏平な円形の礫で表面の平坦部全体に明瞭ではないが使用痕が観察される。9は、厚みのある楕円形の礫で表面全体に明瞭な使用痕が観察される。裏面は、礫面が剥離しているため不明である。10は、偏平で歪な楕円形の礫で明瞭な使用痕が観察される。

第2類 (11, 12)

2類に属するものは、使用面が2面以上の石器で形状は異なる。11は、柱状で端部の極一部を欠損する。使用痕は、2側面に観察される。12は、角張った球形の礫でやや平らな4面の全体に使用痕が観察される。

第3類 (13, 14, 15, 16, 17, 18)

3類に属するものは、使用面が2面の石器で偏平な円形である。13・14は、偏平で小形の円形の礫である。表面と裏面の全体に、やや明瞭に欠ける使用痕が観察される。15は、偏平で掌ほどの円形の礫で明瞭に欠ける使用痕が観察される。16は、偏平で掌ほどの円形の礫で2/3が欠損する。やや明瞭に欠ける使用痕が観察される。17は、厚みのある大きめの円形礫の一端を打ち欠いている。礫面は、明瞭に欠ける使用痕が観察される。18は、偏平な円形の礫で3/4が欠損する。表面と裏面の全体に、緻密に磨り潰れた使用痕が観察される。

磨石・台石 (19) (第15図, 第10図版)

磨石・台石は、1点出土した。その石器組成に占める割合は1.3%である。19は、砂岩で厚みのある楕円形である。一端部を欠損するがほぼ完形品で、ゆるやかな曲面を磨石として使用し、平たい面を台石として使用している。磨面は、中央部が一部欠損するが使用痕は明瞭である。台面は、ほぼ全面にかけて敲打された痕が残る。

磨石・敲石 (20, 21, 22, 23, 24) (第16図, 第17図, 第10図版)

磨石・敲石は、6点出土した。その石器組成に占める割合は6.7%である。石材は全て砂岩であり、形状は円形か楕円形で使用状況より4類に分類される。以下、類ごとに説明を加える。

第1類 (20)

1類に属するものは、1面を磨石として使用し一端を敲石として使用するものである。20は、やや厚みのある楕円形である。一端部を欠損するがほぼ完形品で、ゆるやかな曲面を磨面として使用し、一端を敲石として使用している。磨面は、使用痕が明瞭ではない。敲打痕は、縁辺の先端部に観察される。

第2類 (21)

2類に属するものは、2面を磨石として使用し縁辺を敲石として使用するものである。21は、偏平な円形である。磨面は、両面とも使用痕が明瞭ではない。敲打痕は、縁辺の全面に観察される。

第3類 (22, 23)

3類に属するものは、2面を磨石として使用し両端を敲石として使用するものである。22は、やや厚みのある楕円形である。磨面は、両面とも使用痕が明瞭ではない。敲打痕は、縁辺の両端に集中しており他では観察されない。23は、偏平な楕円形である。両面とも使用痕が明瞭ではない。敲打痕は、縁辺の両端に集中している。

第4類 (24)

4類に属するものは、1面を磨石として使用し、1面および両端を敲石として使用するものである。24は、偏平な円形である。磨面は、使用痕が明瞭ではない。片面の敲打痕は、中心周辺に観察される。縁辺の敲打痕は、両端とも5程の範囲で大きな凹凸が観察される。使用頻度が高かったと推測され、敲打痕は深い。

敲石 (25, 26, 27) (第17図, 第11図版)

敲石は、3点出土した。その石器組成に占める割合は4.0%である。石材は全て砂岩であり、形状はバラツキがみられ使用状況より3類に分類される。以下、類ごとに説明を加える。

第1類 (25)

1類に属するものは、両端を敲石として使用するものである。25は、中心が膨らむ筒状の礫である。敲打痕は、両端に集中して観察される。

第2類 (26)

2類に属するものは、1面と両端を敲石として使用するものである。26は、偏平でやや長い楕円形である。片面の敲打痕は、中心周辺に観察される。縁辺の敲打痕は、両端とも3cm程の範囲で明瞭ではない。

第3類 (27)

3類に属するものは、4面を敲石として使用するものである。27は、サイコロ状で半分が欠損している。敲打痕は、4面で集中して観察される。

台石 (28, 29, 30, 31) (第18図, 第19図, 第11図版)

台石は、4点出土した。その石器組成に占める割合は5.2%である。石材は全て砂岩であり、形状はバラツキがあり使用状況より2類に分類される。以下、類ごとに説明を加える。

第1類 (28, 29)

1類に属するものは、1面を台石として使用するものである。28・29は、偏平で欠損部が大きく形状は不明である。1面のほぼ全面に敲打された痕が観察される。

第2類 (30, 31)

2類に属するものは、2面を台石として使用するものである。30は、柱状で1/3程欠損する。1面の中心周辺に激しく敲打された痕が観察される。片面は、ほぼ全面に敲打された痕が観察される。31は、大形で歪な柱状で風化が激しい。両面とも、中心周辺に敲打された痕が観察される。

石皿 (32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39) (第20図～第22図, 第11図版, 第12図版)

石皿は、8点出土した。その石器組成に占める割合は10.7%である。石材は全て砂岩であり、形状はバラツキがあり使用状況より4類に分類される。砂岩製のため、使用痕が明瞭に観察されない石皿もあった。以下、類ごとに説明を加える。

第1類 (32, 33)

1類に属するものは、1面を磨面として使用するものである。32は、厚みのある楕円形で半分を欠損する。磨面は、全面であるが明瞭ではない。33は、偏平で歪な三角形の大きめの礫である。磨面は、中心周辺で明瞭ではない。

第2類 (34, 35, 36)

2類に属するものは、2面を磨面として使用するものである。34は、欠損部分が大きく形状は不明である。残存する2面で、使用痕が明瞭である。35は、偏平で一部を欠損する四角形である。2面とも、使用痕が滑らかで礫面との間が明瞭である。36は、偏平で歪な四角形である。2面とも、全面を使用するが、1面は使用痕が滑らかで片面はやや明瞭ではない。

第3類 (37, 38, 39)

3類に属するものは、2面を磨面として使用し同面に敲打された痕跡を有するものである。37, 38は偏平で欠損部分が大きく形状は不明である。2面とも、使用痕が滑らかで明瞭だが、その片面に敲打された痕が観察される。39は、1面に使用痕が明瞭で激しく敲打された痕が観察される。片面は、使用痕と敲打された痕が観察される。

凹石 (40) (第23図, 第12図版)

凹石は、1点出土した。その石器組成に占める割合は1.3%である。40は、砂岩で形状は細長い卵状の礫である。礫の平坦面に、細長くやや深く凹した痕が観察される。

石斧 (41, 42, 43, 44) (第23図, 第12図版)

石斧は、4点出土した。その石器組成に占める割合は5.2%である。41・42は、流紋岩で一部を欠損する。打製石斧であるが、41は刃部周辺に、42は側面周辺に局部磨製が観察される。43・44は、頁岩でごく一部分が残存する。石斧の側面の破片であるが、局部磨製が観察される。

石鏃 (45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58) (口絵, 第24図)

石鏃は、14点出土した。その石器組成に占める割合は18.7%である。石材は、黒曜石10点、サヌカイト3点、チャート1点である。出土した石鏃は、石器の形状において二等辺三角形(第1類)と三角形(第2類)に分類できる。さらに第1類および第2類は、その基部の作り出しの状況で、平基のもの(a)、浅く抉れるもの(b)、V字状に抉れるもの(c)、U字状に抉れるもの(d)の四つに細分される。以下順ごとに説明を加える。

第1a類 (45)

1a類は、全体形が二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は、1点である。45は、黒曜石製で一部を欠損するが、右上がりに作り出されている。

第1b類 (46, 47, 48, 49, 50)

1b類は、全体形が二等辺三角形を呈する凹基(浅い抉り)の石鏃である。資料数は、5点で石材は黒曜石4点、サヌカイト1点である。46は、剝離面を多く残し、側縁を粗雑に調整している。47は、雑に調整し右上がりに作り出されている。48は、右脚の先端部を欠損するがほぼ完成形で、左上がりに作り出されている。49は、左脚の先端部を欠損するがほぼ完成形で、丁寧な調整が施されている。50は、偏平なサヌカイト製で側縁を粗雑に調整している。

第1c類 (51, 52)

1c類は、全体形が二等辺三角形を呈する凹基(V字状の抉り)の石鏃である。資料数は、2点である。51は、黒曜石製で先端部を欠損するが、丁寧な調整が施されている。52は、偏平な安山岩製で基部が歪に抉れ側縁を調整している。

第1d類 (53, 54)

1d類は、全体形が二等辺三角形を呈する凹基(U字状の抉り)の石鏃である。資料数は、2点である。53は、偏平なサヌカイト製で右脚部を欠損するが、丁寧な調整が施されている。54は、チャート製で左脚部を欠損するが、緻密な調整が施されている。両側縁とも鋸歯状の調整加工が施されている。

第2 a類 (55)

2 a類は、正三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は、1点である。55は、黒曜石裂で丁寧な調整が施されている。両側縁とも鋸歯状の調整加工が施されている。

第2 b類 (56, 57)

2 b類は、正三角形を呈する凹基（浅い抉り）の石鏃である。資料数は、2点である。56は、黒曜石裂で右側先端部の一部を欠損するが丁寧な調整が施されている。両側縁とも鋸歯状の調整加工が施されている。57は、黒曜石裂で先端部の一部を欠損するが丁寧な調整が施されている。

第2 c類 (58)

2 c類は、正三角形を呈する凹基（V字状の抉り）の石鏃である。資料数は、1点である。58は、黒曜石裂で左脚部を欠損する。両側縁とも鋸歯状の調整加工が施されている。

石鏃 (59) (口絵, 第24図)

石鏃は、1点出土した。その石器組成に占める割合は1.3%である。59は、黒曜石裂で先端部を鏃として使用したものと考えられるが、最先端部を欠損している。石器は、剥片から全体に粗雑な調整を施している。

石核 (60) (第25図, 第12図版)

石核は、1点出土した。その石器組成に占める割合は1.3%である。60は、チャート製で円錐形を呈している。やや黒緑色を帯びた硬質の石材で、打撃調整面から剥片を打ち欠いている。通常の頁岩よりガラス質で非常に硬く、調整が困難な石材である。

使用痕のある剥片石器 (61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71) (第25図, 第12図版)

使用痕のある剥片は、11点出土した。その石器組成に占める割合は14.7%である。石材は、黒曜石7点、チャート3点、流紋岩1点、である。以下、資料ごとに説明を加える。

61は、チャート製で柱状を呈している。剥片の途中が折れ、側面の一部にわずかな使用痕が観察される。62は、黒曜石裂で横長剥片に細かな加工を施す。表面の上側縁に、微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。剥離面は、他の石器と比較して風化が進んでいる。リタツチャーリーなどとしての使用が考えられ、旧石器時代の石器の可能性が有る。縄文時代の石器としてまとめたが、今後の遺跡の調査と併せ、検討を加えたい。63は、黒曜石裂で端部の一部を欠損する。右側縁に、表裏両面から微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。64は、黒曜石裂で縦長剥片である。表面の右側縁に、微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。65は、黒曜石裂の縦長剥片で上部を欠損する。表面の右側縁に、微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。66は、黒曜石裂の縦長剥片で上部を欠損する。表面の左側縁に、細かな剥離が観察される。67は、黒曜石裂の横長剥片である。表面の右側縁に微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。68は、黒曜石裂で横長剥片である。表面の下側縁に剥離が観察される。69は、チャート製の剥片で表面の下側縁に微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。70は、チャート製の縦長剥片で下部を欠損する。両面の左右先端部に集中して、2次調整の細かな剥離が観察される。71は、流紋岩製の縦長剥片である。表面の左側縁に粗雑に打ち欠く刃部の加工が観察される。石材は風化し全体にもろい感じであるが、刃部は整っている。

その他石器 (72, 73, 74, 75) (第26図, 第12図版)

その他の石器として、4点の用途不明の石器が出土した。以下、資料ごとに説明を加える。72は、砂岩製の円盤型石器で用途不明である。表面は礫面で、裏面は剥離面である。円盤状を呈し、円縁に沿って刃こぼれ状の剥離が観察される。73は、泥岩製の縦長の礫器の一部である。表・裏面とも剥離面を調整し、側面に磨き痕が観察される。小資料のため用途不明である。74は、黒曜石製で側面を鋸歯状に加工する石器の極一部分である。大部分が欠損するため器種不明であるが、細かな調整を施している。75は、流紋岩製で側面を鋸歯状に加工する石器の極一部分である。74と同じように、大部分を欠損するため器種不明であるが、細かな調整を施している。74, 75は、類似した用途の石器であろう。

不明な石器 (①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒) (第27図, 第28図, 第29図)

使用痕の不明な剥片 (①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱)

使用痕の不明な剥片として、18点が観察された。以下、資料ごとに説明を加える。

①は、チャート製の剥片である。表面の右側縁に不明瞭な剥離が観察される。②は、黒曜石製の縦長剥片である。裏面の右側縁に不明瞭な剥離が観察される。③は、黒曜石製の剥片で一部が欠損する。表面の、右側縁が剥離する。④は、黒曜石製の剥片で極一部が残存する。⑤は、黒曜石製の縦長剥片で一部が残存する。表面の左側縁に不明瞭な剥離が観察される。⑥は、チャート製の剥片である。⑦は、チャート製の横長剥片である。表面の左右側縁に不明瞭な剥離が観察される。⑧は、チャート製で剥離面が観察される石核状の剥片である。⑨は、チャート製の剥片で表面に不明瞭な剥離が観察される。⑩は、サヌカイト製の縦長剥片である。左斜め上部からの打撃によって剥離した剥片で、裏面の左側縁に粗雑で不明瞭な剥離が観察される。⑪は、流紋岩製の縦長剥片で下部先端の極一部を欠損する。表面の右側縁から下側縁にかけて不明瞭な剥離が観察される。⑫は、流紋岩製の横長剥片である。裏面の右側縁に不明瞭な剥離が観察される。⑬は、流紋岩製の横長剥片である。表面の左側縁には、粗雑で不明瞭な剥離が観察される。⑭は、流紋岩製の縦長剥片で下部先端の一部を欠損する。裏面の右側縁に、不明瞭な剥離が観察される。⑮は、流紋岩製の縦長剥片である。表面の右側縁上部から下部にかけて、不明瞭な剥離が観察される。⑯は、流紋岩製の横長剥片である。⑰は、砂岩製の剥片である。表面は礫面で、裏面の左側縁には、不明瞭な剥離が観察される。⑱は、流紋岩製の縦長剥片である。表面には礫面が残っており、裏面が剥離面である。裏面の下側縁に不明瞭な剥離が観察される。

使用痕の不明な礫器 (㉒㉓㉔)

使用痕の不明な礫器として、4点が観察された。石器としての認定も困難であるが、説明を加える。

㉒は、流紋岩製の縦長の礫で完形品である。剥離には、統一性がなく風化が著しい。㉓は、流紋岩製の縦長の礫で下部の極一部を欠損する。㉔は、泥岩製の縦長の礫で1/3が残存する。裏面の剥離面は、石器製作時の剥離ではない。剥離には、統一性がなく風化が著しい。㉕は、流紋岩製の礫である。表面には礫面が残り、裏面には剥離面が残る。表面の上側縁を、大きく剥離するが明確な加工ではない。これらの石器は、風化が著しく剥離に統一性がない。

菅原遺跡出土遺物についての、個々の観察状況は以上のとおりである。今後、遺跡の調査が進むなかで遺構と遺物の検討を深めたい。

第3表 石器(削器)観察表

番号	器種	比率	分類	石材	長さ	幅	厚み	重量	欠損部位	遺構・層・番号	実測
	削器			黒色埴質頁岩	4.6	2.7	1.4	24.0	完形	II a 073	①

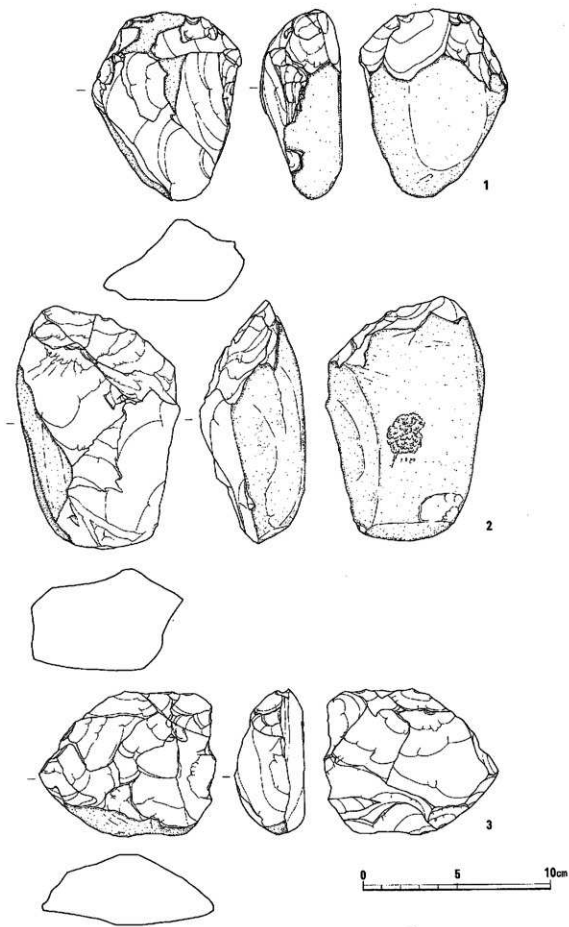
第4表 縄文時代の石器分類表

番号	器種	比率	分類	石材	長さ	幅	厚み	重量	欠損部位	遺構・層・番号	実測			
1	礮器	4.0		流紋岩	9.8	7.9	4.25	290.0	完形	II b 004	75			
2				流紋岩	12.75	8.5	5.45	670.0	完形	II b 043	73			
3				流紋岩	7.7	9.3	3.7	261.0	完形	II a 078	74			
4	祭礼石器	2.7		流紋岩	6.7	8.6	3.15	214.0	完形	B区II a	69			
5				砂岩	17.7	9.1	5.25	865.0	完形	B区II b	70			
6	罫痕のある石器	2.7		砂岩	12.65	10.45	9.4	760.0	一部が残存	A区II a	72			
7				流紋岩	6.05	8.7	2.95	172.0	一部が残存	A区II a	71			
8	磨石	15.0	1	砂岩	8.6	7.8	3.5	310.0	完形	B区II b	2			
9				砂岩	12.1	8.6	6.45	620.0	極一部を欠損	A区B2 SX8	12			
10				砂岩	11.6	8.65	3.4	415.0	完形	A区II a	13			
11			2	砂岩	16.2	7.0	7.35	1305.0	極一部を欠損	II b 066	47			
12				砂岩	8.4	7.85	6.7	620.0	完形	B区II b	11			
13			3	砂岩	8.1	7.25	2.4	215.0	完形	A区II b	3			
14				砂岩	8.75	8.7	3.6	415.0	完形	A区A1-2-3	6			
15				砂岩	11.9	10.3	4.0	765.0	完形	A区II a	10			
16				砂岩	4.65	8.0	2.7	105.0	2/3を欠損	B区II b	8			
17				砂岩	7.4	11.8	6.0	660.0	1/3を欠損	127	48			
18				砂岩	8.3	6.1	2.5	180.0	3/4を欠損	A区II a	45			
19			磨石・台石	1.3		砂岩	16.75	10.2	6.7	1675.0	極一部を欠損	A区II b	14	
20			磨石・敲石	6.7	1	砂岩	10.8	7.7	4.1	520.0	一部を欠損	A区II b	4	
21						砂岩	9.75	9.5	4.1	5508.0	完形	A区II b	1	
22						3	砂岩	11.3	8.2	4.4	620.0	完形	II a 025	5
23							砂岩	11.7	9.0	3.7	495.0	完形	B区	7
24						4	砂岩	9.8	8.9	3.8	475.0	完形	112	9
25			敲石	4.0	1	砂岩	18.9	7.9	8.7	1555.0	完形	A区II a	46	
26	2	砂岩				11.6	7.1	3.5	410.0	完形	166	44		
27	3	砂岩				6.2	10.7	8.35	680.0	1/2を欠損	187	49		
28	台石	5.2	1	砂岩	12.2	8.3	4.4	570.0	一部が残存	B区II b	51			
29				砂岩	15.95	10.05	4.45	1005.0	一部が残存	A区II b	52			
30			2	砂岩	21.7	13.2	9.8	3700.0	1/3を欠損	II b 037	53			
31				砂岩	36.5	16.3	11.9	7625.0	完形	B区	54			
32	石皿	10.7	1	砂岩	28.9	17.7	7.0	3985.0	極一部を欠損	A区II b	27			
33				砂岩	16.7	7.2	7.8	1085.0	1/2を欠損	127	50			
34			2	砂岩	9.05	9.55	5.5	420.0	一部が残存	II b 056	25			
35				砂岩	17.9	18.1	6.2	3010.0	完形	II b 002	26			
36				砂岩	14.75	15.35	2.95	1135.0	完形	A区B3ベルト	22			
37			3	砂岩	12.1	12.85	4.5	1170.0	一部が残存	II a 080	24			
38				砂岩	11.55	13.0	5.2	940.0	一部が残存	II b 070	23			
39				砂岩	14.8	10.9	6.15	1155.0	一部が残存	103	21			
40			凹石	1.3		砂岩	12.15	6.05	4.6	465.0	完形	A区II a	59	
41			石斧	5.2		流紋岩	13.8	7.05	2.8	291.0	完形	B区II b	55	
42	流紋岩	11.4				6.25	3.6	273.0	一部を欠損	B区II a	56			
43	頁岩	6.65				4.4	2.45	6.20	極一部が残存	B区II a	57			
44	頁岩	4.75				5.2	0.9	18.4	極一部が残存	II b 012	58			

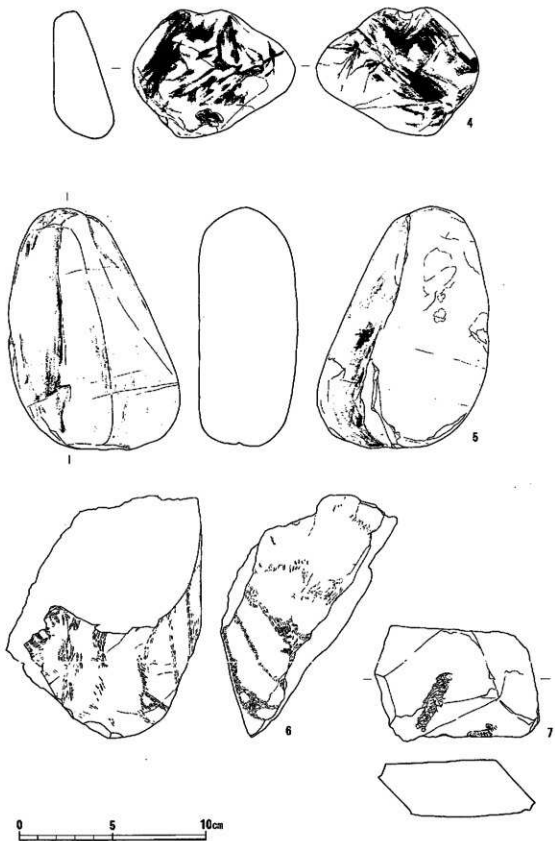
番号	器種	比率	分類	石材	長さ	幅	厚み	重量	欠損部位	造形・層・番号	実測
45	石鏃	18.7	1a	黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.6	先端部を欠損	I a B4-5-6	92
46				黒曜石	1.5	1.35	0.3	0.5	完形	II b 050	91
47			黒曜石	1.5	1.35	0.3	0.6	完形	152	88	
48			1b	黒曜石	1.65	1.45	0.35	0.6	右脚部先端を欠損	A区 I b (表土下)	15
49				黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.7	左脚部先端を欠損	I b A4-5-6	85
50				サヌカイト	1.7	1.3	0.2	0.4	左脚部先端を欠損	II a 026	86
51			1c	黒曜石	1.55	1.8	0.35	0.8	先端部欠損	II a 022	82
52				サヌカイト	2.3	1.65	0.2	0.8	完形	II b 068	83
53			1d	サヌカイト	1.4	1.1	0.2	0.4	右脚部欠損	II a 028	84
54				チャート	2.0	1.8	0.5	1.4	左脚部欠損	II a 014	81
55			2a	黒曜石	1.2	1.15	0.25	0.3	完形	II a 027	90
56			2b	黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.5	右脚部先端を欠損	I b A4-5-6	89
57				黒曜石	1.2	1.2	0.25	0.5	先端部欠損	II a 024	87
58			2C	黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.7	左脚部欠損	I a B4-5-6	93
59	石鏃	1.3		黒曜石	2.7	1.65	0.5	3.2	完形	A区 II a	36
60	石核	1.3		チャート	2.5	3.45	1.75	14.0	完形	A区 II a	19
61	剥片石器	14.7		チャート	1.25	2.85	1.1	3.6	完形	B区 II a	20
62				黒曜石	1.3	1.85	0.5	1.1	完形	A区 II a	95
63				黒曜石	2.55	1.65	0.4	1.7	上部の先端を欠損	A区 II a	16
64				黒曜石	2.5	1.0	0.25	1.0	完形	A区 II a	29
65				黒曜石	1.8	1.6	0.3	1.2	上部を欠損	A区 II a	30
66				黒曜石	1.7	3.0	0.5	2.5	上部を欠損	A区 II b	31
67				黒曜石	3.15	1.9	0.9	4.8	完形	A区 I b (表土下)	37
68				黒曜石	0.95	1.85	0.45	0.7	完形	II b 010	32
69				チャート	2.7	0.3	1.05	10.8	完形	A区 II b (最下層)	42
70				チャート	3.05	1.5	0.6	3.6	一部欠損	A区 II a	18
71				流紋岩	6.5	3.3	0.7	12.4	完形	A区 I b (表土下)	28
72	その他石器	5.2		砂岩	7.1	7.05	1.3	85.1	完形	II b 111	63
73				泥岩	8.2	7.1	2.25	128.0	不明	B区 II a	78
74				黒曜石	1.8	0.9	2.9	0.4	不明	B区 I b	
75				流紋岩	1.9	1.15	4.0	0.5	不明	I a	

縄文時代の不明な石器

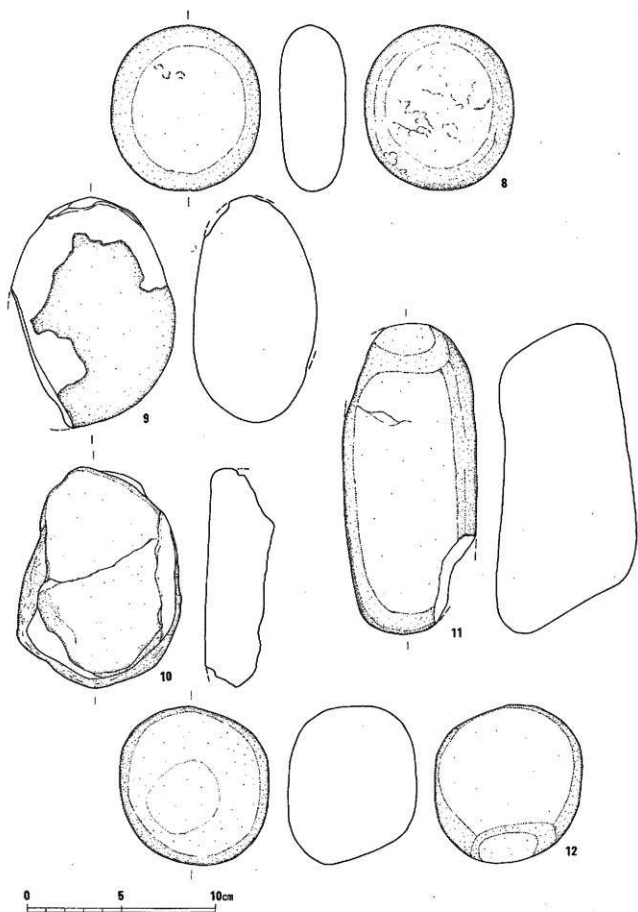
①	不明な剥片			チャート	1.9	3.1	0.85	4.4	完形	A区 II a	17
②				黒曜石	3.1	2.05	0.8	5.5	完形	A区 II 091	34
③				黒曜石	2.2	1.3	0.6	1.2	一部が欠損	B区 II b	33
④				黒曜石	1.2	0.65	0.2	0.1	一部が残存	B区 II a	35
⑤				黒曜石	1.5	1.6	1.3	0.6	一部が残存	II a	96
⑥				チャート	2.7	2.8	0.9	3.7	完形	II a 019	39
⑦				チャート	4.0	2.05	1.4	9.5	完形	II a 017	40
⑧				チャート	4.4	5.1	1.8	28.4	完形	II b 006	38
⑨				チャート	3.1	2.1	0.85	5.9	完形	A区 II b (最下層)	41
⑩				サヌカイト	3.7	2.15	0.65	4.4	完形	II a	94
⑪				流紋岩	6.8	5.85	1.7	57.8	完形	II a 018	61
⑫					5.15	6.35	1.1	22.9	完形	A区 II b	60
⑬					6.4	9.3	2.2	121.8	完形	A区 II a	65
⑭					6.75	3.65	0.75	21.7	一部欠損	II a 016	66
⑮					6.85	4.95	1.3	44.4	完形	A区 II a	62
⑯					4.2	8.4	1.0	35.3	一部欠損	A区 II a	67
⑰				砂岩	7.9	10.75	3.25	230.8	完形	A区 II b	64
⑱					流紋岩	5.4	6.4	1.45	45.6	完形	II a 011
⑲				不明な磨器			流紋岩	7.25	15.7	2.85	355.0
⑳	流紋岩	12.7	6.2				4.05	300.0	先細部が欠損	B区 II b	76
㉑	泥岩	11.05	5.8				3.2	218.0	一部が欠損	II b 054	77
㉒	流紋岩	9.85	9.8				6.2	635.0	完形	B区 II b	80



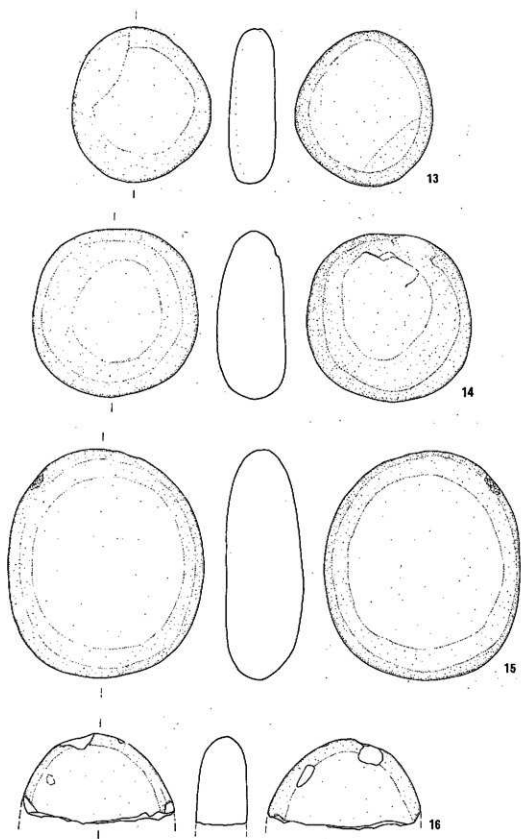
第11圖 出土遺物実測圖 石器(裸器) 1, 2, 3



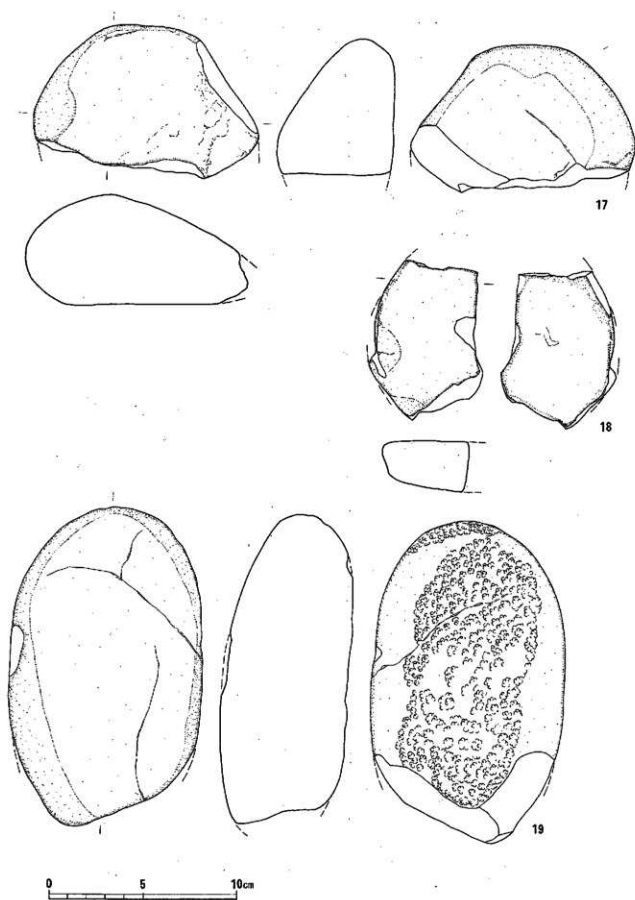
第12図 出土遺物実測図 石器(祭礼石器)4, 5
 (動物の齧り痕のある石器)6, 7



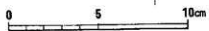
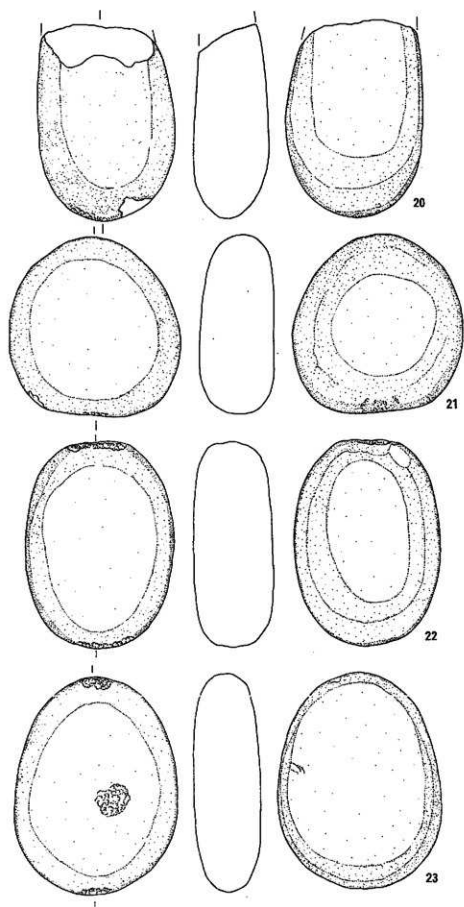
第13图 出土遗物实测图 石器(磨石) 8, 9, 10, 11, 12



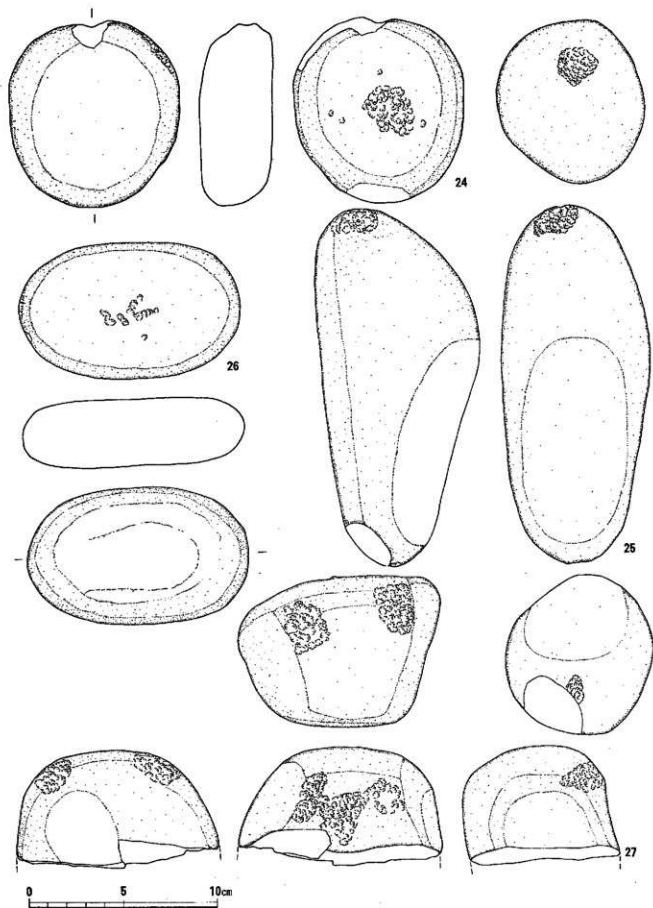
第14图 出土文物实测图 石器(磨石) 13, 14, 15, 16



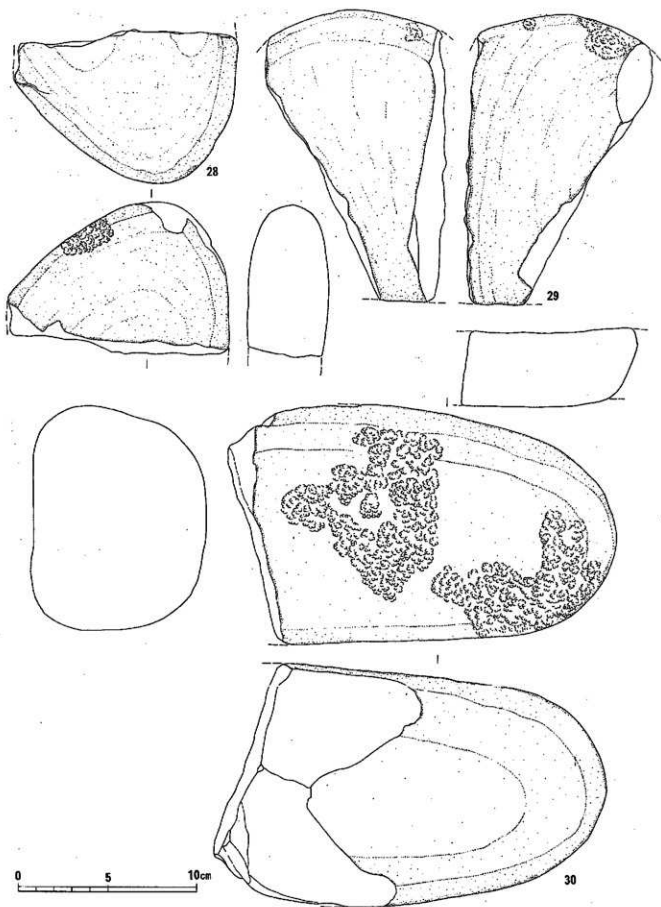
第16图 出土遺物実測図 石器（磨石）17, 18, 19
（磨石·台石）19



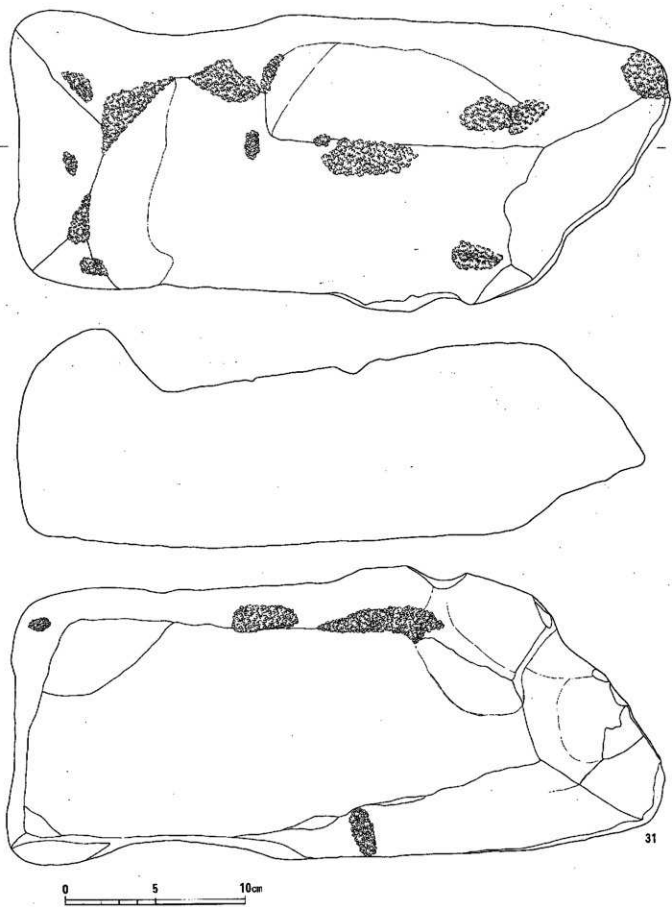
第16圖 出土遺物実測図 石器(磨石・蔽石) 20, 21, 22, 23



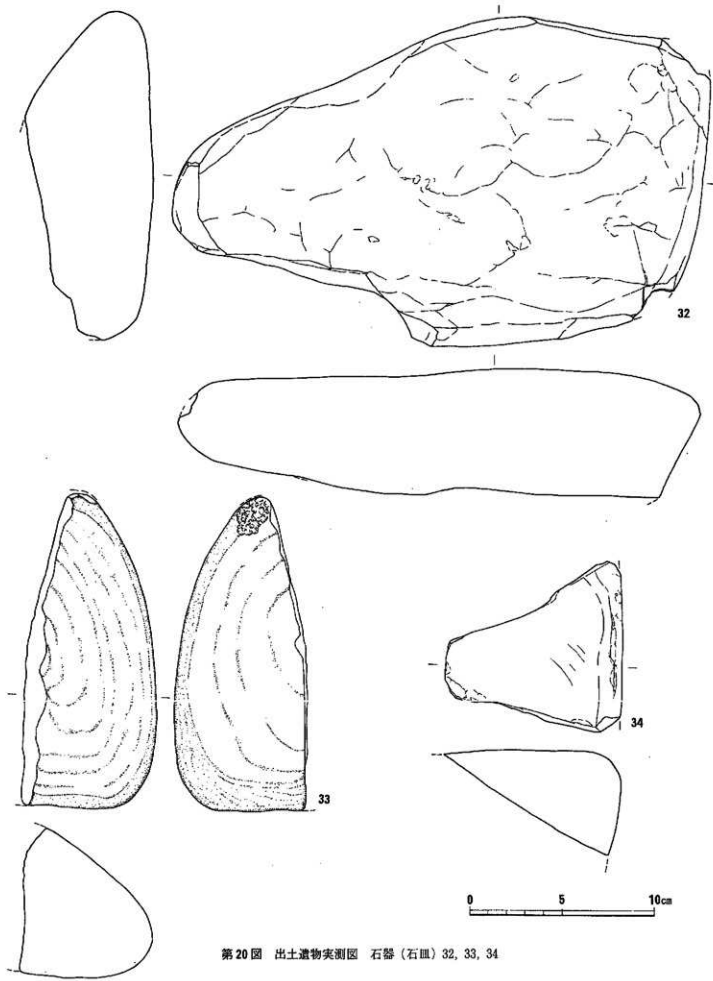
第17图 出土遺物実測図 石器(磨石·砾石) 24
(砾石) 25, 26, 27



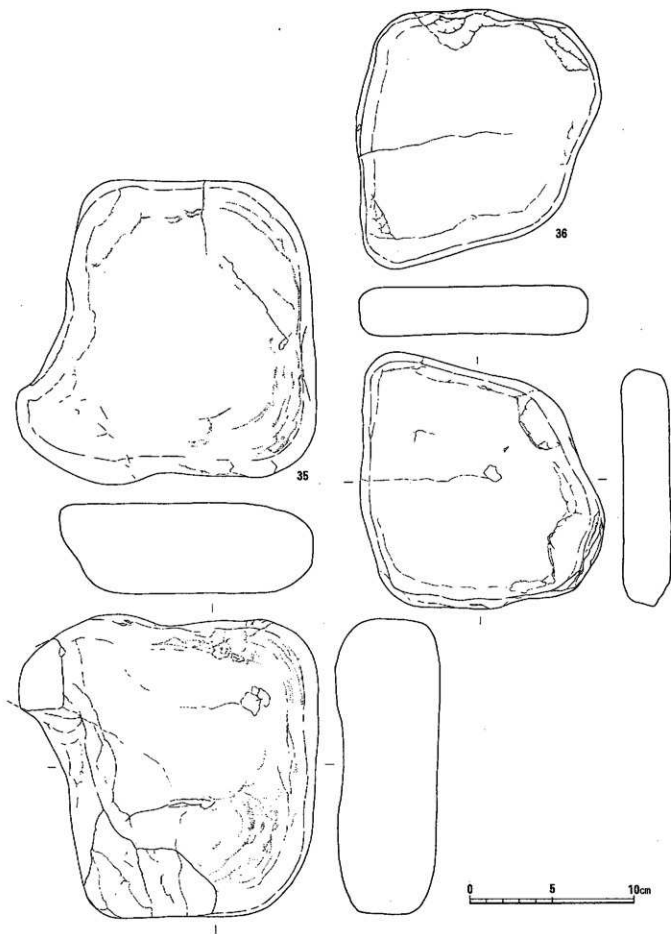
第18图 出土遺物実測図 石器(台石) 28, 29, 30



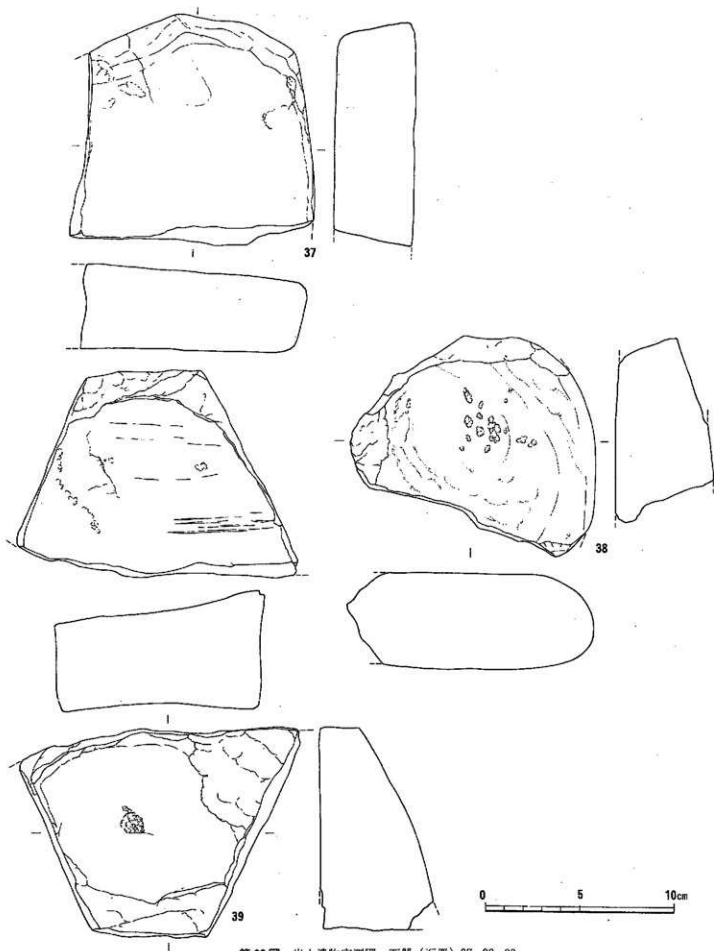
第19圖 出土遺物実測圖 石器(右石) 31



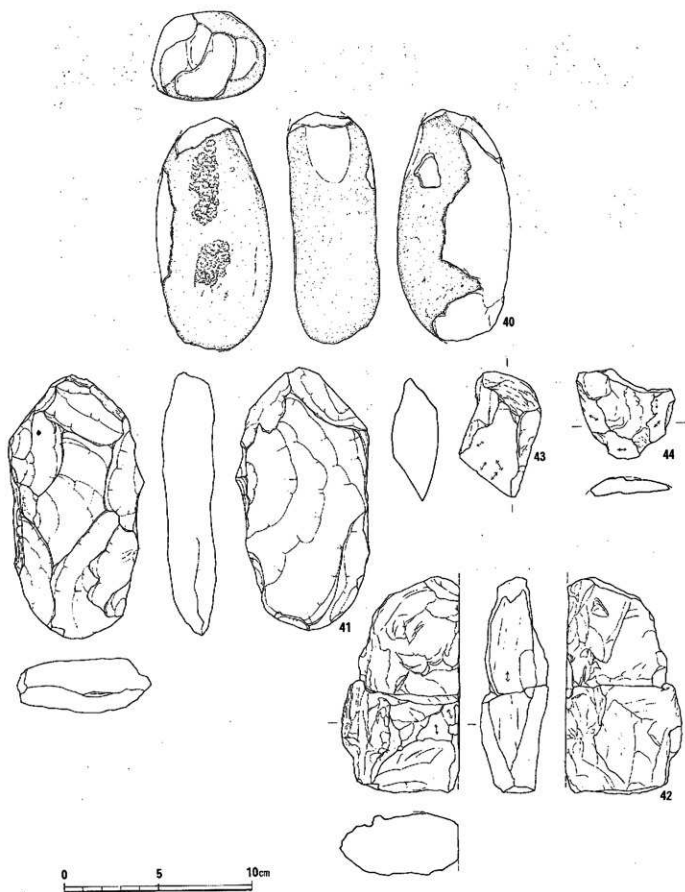
第20图 出土遺物実測図 石器(石皿) 32, 33, 34



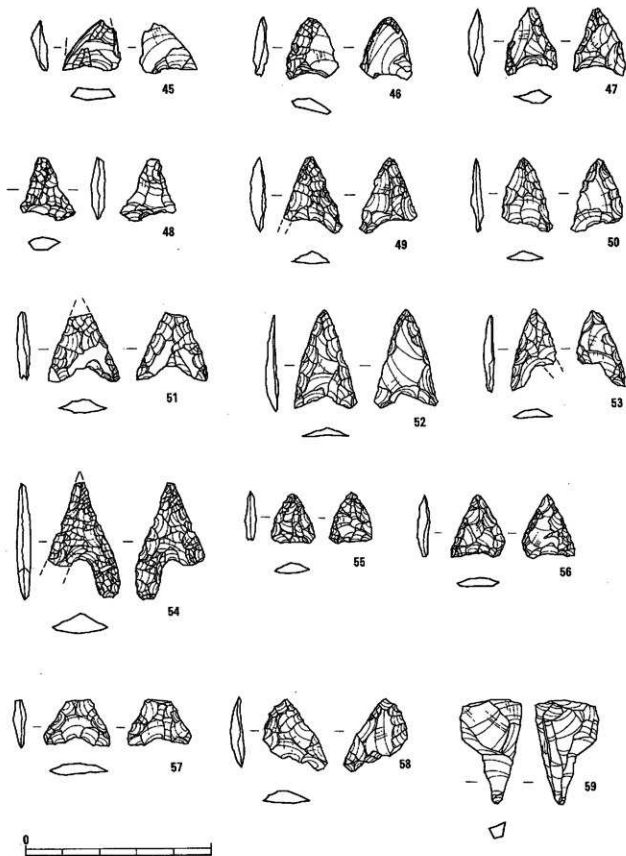
第21圖 出土遺物実測圖 石器(石皿)35、36



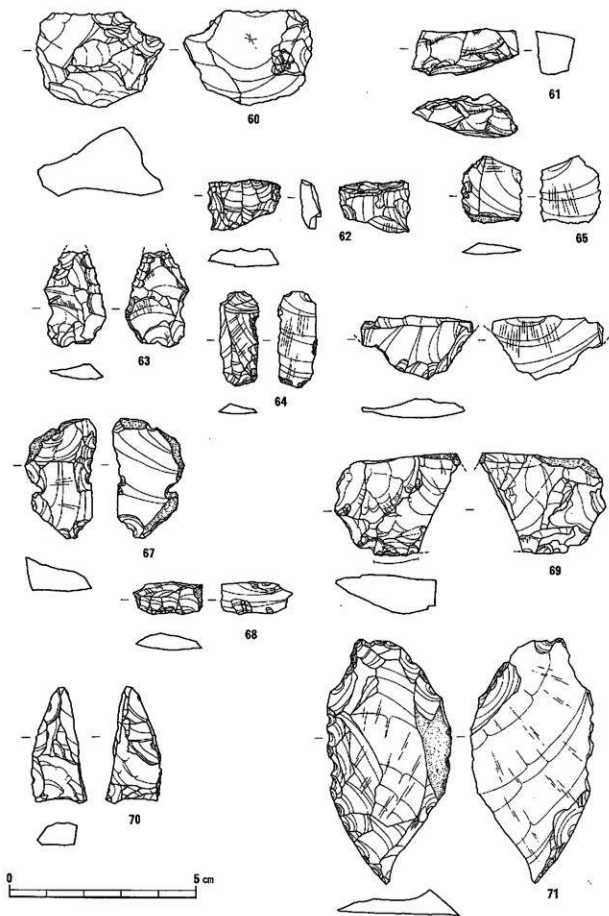
第22图 出土遺物実測図 石器(石皿) 37, 38, 39



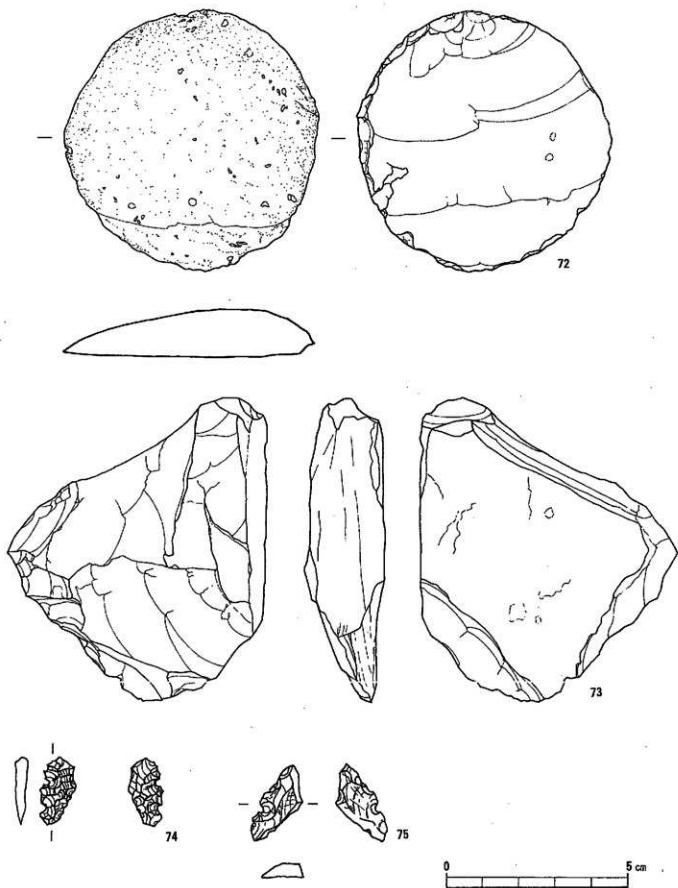
第23图 出土遺物実測図 石器(凹石)40
(石斧)41, 42, 43, 44



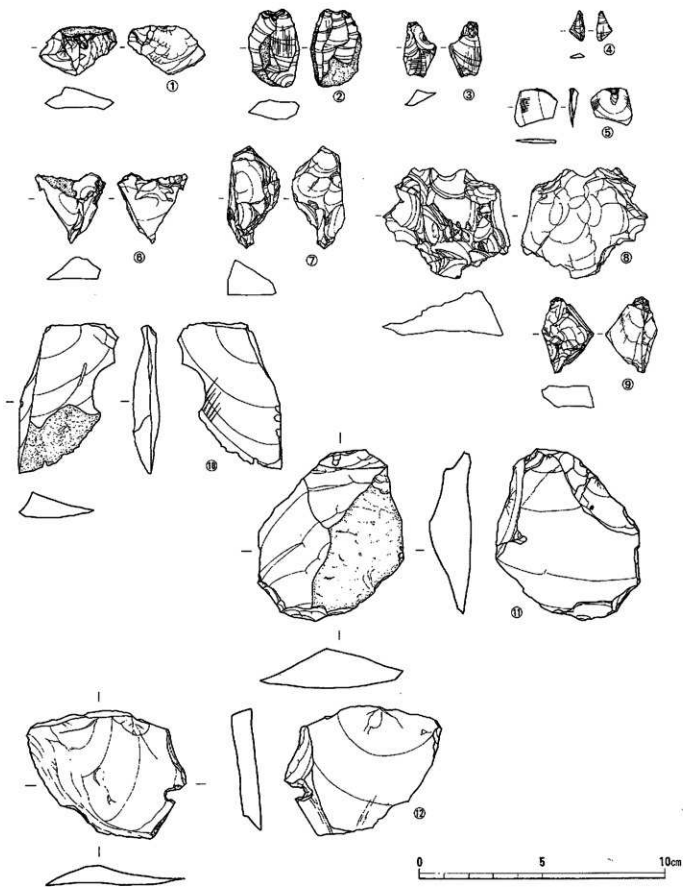
第24图 出土遺物実測図 石器(石鏃) 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51,
52, 53, 54, 55, 56, 57, 58
(石鏃) 59



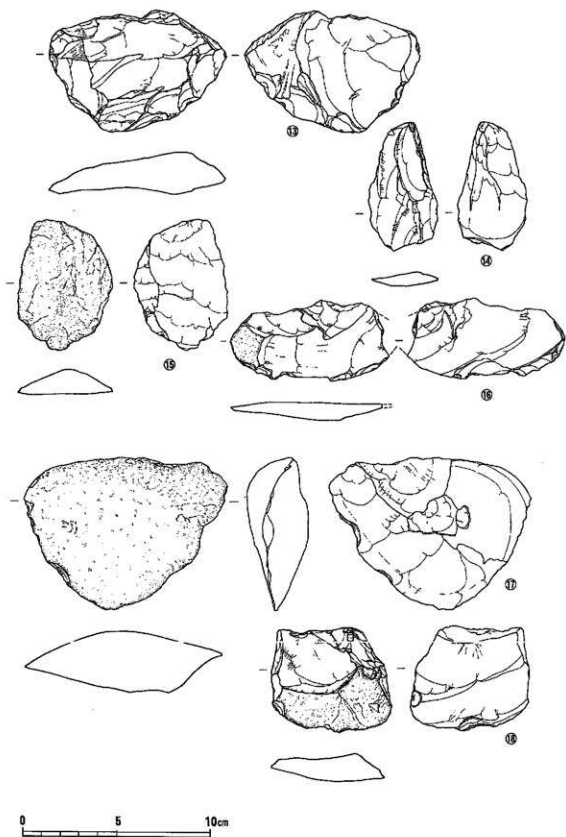
第 25 图 出土遺物実測図 石器(石核) 60
 (剥片石器) 61, 62, 63, 64, 65, 66,
 67, 68, 69, 70, 71



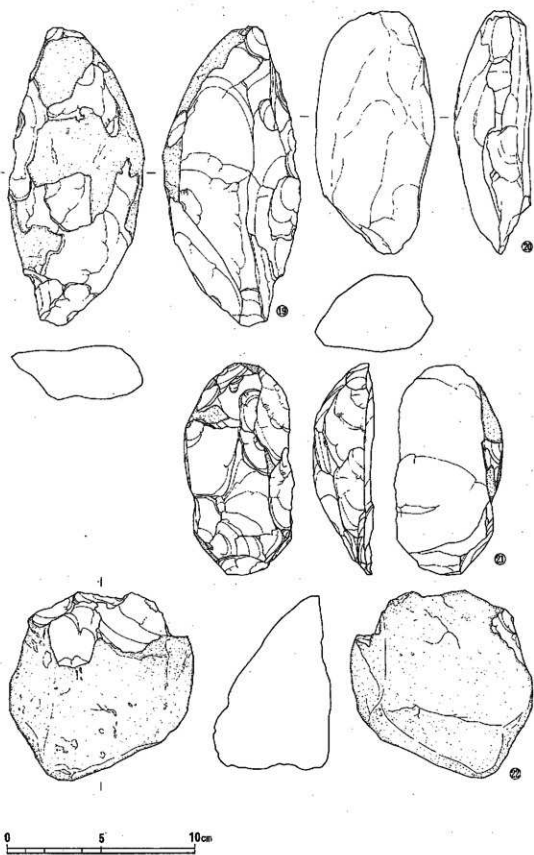
第26図 出土遺物実測図 石器(その他の石器) 72, 73, 74, 75



第27图 出土遺物実測図 石器(不明な剥片) ①②③④⑤⑥
⑦⑧⑨⑩⑪⑫



第28图 出土遗物实测图 石器(不明な剥片) ⑬⑭⑮⑯⑰⑱



第29圖 出土遺物実測図 石器（不明な禮器）①②③④⑤

第6章 まとめ

1 菅原遺跡調査成果

菅原遺跡の発掘調査は、本渡市内はもとより天草の縄文時代研究の貴重な資料となった。その成果を、遺構、土器、石器をとおしてまとめる。

(1) 遺構について

菅原遺跡の遺構は、不明土壌が13基が丘陵斜面の南西側より検出されている。この内、5基は形状より住居跡の可能性があり、菅原遺跡の場合、遺構が丘陵斜面に位置し、しかも褐色の粘土層に掘り込んでいるため、遺構内の埋土と地山の区分は非常に困難であった。不明土壌13基は、形状や大きさにバラツキがあった。今回の調査地点は丘陵の西側にあたるが、遺跡の範囲は西側におもよび、遺構が存在することは確実である。

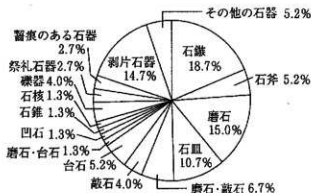
(2) 土器について

菅原遺跡より出土した土器は、明確な文様のついた遺物がないため不明点が多いが、胎土、焼成、形状より縄文時代の押型文土器に属するものと考えられる。これらの土器は、隣接する丸尾ヶ丘遺跡より、昭和30年代を中心に鶴田倉造氏や山崎純男氏によって表面採集された土器（押型文土器）と類似する。検出された土器は、粗砂粒混じりでもろいものが多いが、今後の資料となろう。遺物の検出は極めて少数であったが、本渡市における遺跡の分布を考える上で貴重な資料と言えよう。

また、その他の土器として、土師器に属するものが出土している。このことは、菅原遺跡周辺での、別時代の遺跡の存在を示すものであり、今後の調査により判明するものと思う。

(3) 石器について

菅原遺跡より出土した石器は、旧石器時代1点、縄文時代75点である。縄文時代の石器の器種ごとの比率は第5表のとおりである。この内、磨石・蔽石の占める割合は27.0%で最も高い数値を示す。石皿・台石は、15.9%を占めている。このことは、石皿・台石1個に対して磨石・蔽石が約2個という計算になる。この結果は、"狸谷遺跡の1:3、"白鳥平A遺跡の1:2と比較すると、白鳥平A遺跡により類似した割合となる。また、石鏃の出土頻度は、18.7%を占める。石材からの比率は、第6表のとおりである。石材と器種とは密接に関連するが、砂岩が48.0%、黒曜石25.3%、流紋岩12.0%であった。この内菅原遺跡で注目される石材として、チャートと珪質頁岩があげられる。これまで、天草では発掘事例が少なく石材構成比率を示す資料はないが、菅原遺跡でチャートが6.7%、流紋岩が12.0%を占めることは注目される。石器組成と石材組成について、今後の資料集積が待たれる。



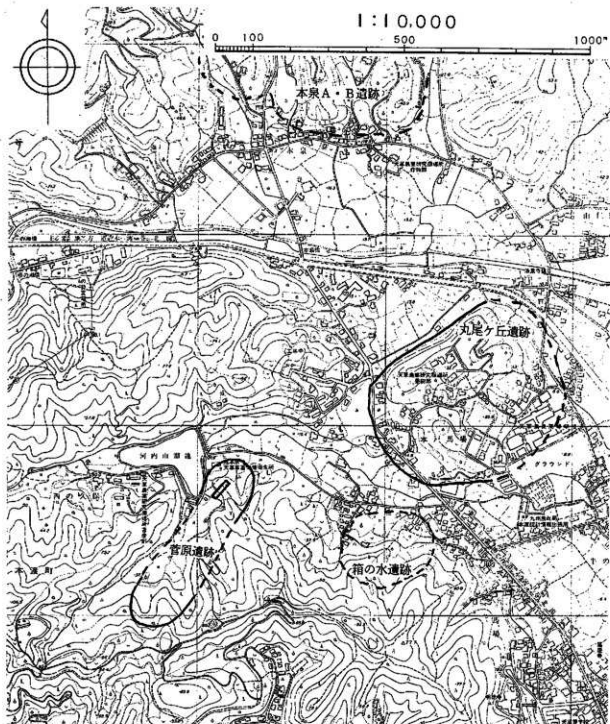
第5表 縄文時代の石器器種別円グラフ



第6表 縄文時代の石器石材別円グラフ

2 遺跡の範囲と年代

今回の菅原遺跡調査は、道路改良工事に伴い1,250㎡が調査対象地域となった。この内、北西地点は一部削平を受けており、実際の発掘面積は780㎡であった。調査に先立ち、周辺の踏査を実施したが、遺物を下記の範囲より採集している。少なくとも、今回の調査した丘陵は、全域が遺跡である。また、南西に位置する小丘陵も遺跡が存在し、この二つの丘陵が菅原遺跡の範囲と考えられる。年代的には、縄文時代早期の遺跡が存在する。この他、現時点では不明であるが、土師器を主とする時代の遺構が存在することも推測される。また、旧石器時代の遺物の出土が期待される（第30図）。



第30図 菅原遺跡と周辺遺跡分布図

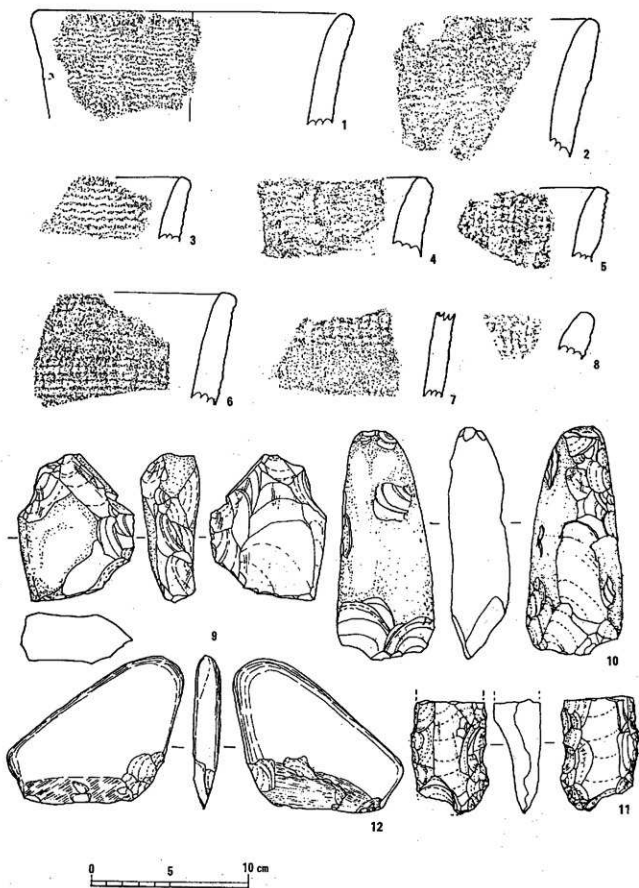
3 菅原遺跡と丸尾ヶ丘遺跡

本渡市内では、本渡市立本渡中学校の郷土クラブを中心として昭和30年代より土器・石器の採集が実施されている。採集された遺物は、当初本渡中学校に保管されていたが、昭和41年の本渡市立天草切支丹館の開館により同館に展示されることとなる。山崎純男氏によると、丸尾ヶ丘遺跡採集の土器の内数点が不明とのことであるが、ほとんどの遺物が天草切支丹館に保管されたのである。昭和56年には本渡市立歴史民俗資料館が開館し、歴史・民俗・考古資料を展示することになる。展示資料の重複を避けるためにも、切支丹館ではキリシタン資料を展示し、資料館では歴史・民俗・考古資料などを展示することが確認され、平成元年3月に土器・石器・陶磁器などの資料を資料館に移管した。ただし、本渡城関係の出土遺物は切支丹館で展示している。以上の経過により、本渡中学校郷土クラブを中心として本渡市内で採集された土器・石器などの考古学的遺物は、現在本渡市立歴史民俗資料館に収蔵・展示されている。

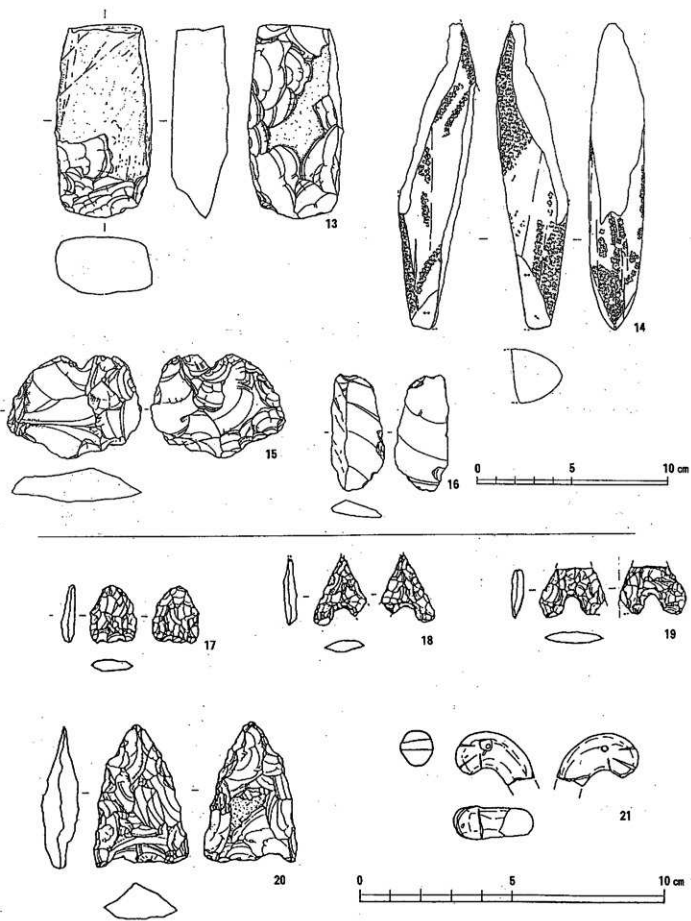
菅原遺跡より出土した遺物や土層状態は、隣接する丸尾ヶ丘遺跡と類似していることが、前述の本渡中学校の郷土クラブ採集資料より観察できる。丸尾ヶ丘遺跡出土遺物の検討は、菅原遺跡の把握にも重要であり、丸尾ヶ丘遺跡の概要と資料を述べる(第31図～第33図)。

⁹⁾丸尾ヶ丘遺跡は、広瀬川による沖積地の奥まった位置にある通称丸尾ヶ丘と呼ばれる独立丘陵上に遺跡がひろがる。丘陵はゆるやかな傾斜をもち、標高30m。丘陵全面の約7ヘクタールに遺物が散布している大規模遺跡である。場所によって遺物の集中度が異なり、地点によって遺物も異なるので、時期の異なる遺跡が点々と存在し、結果として大遺跡となっていると思われる。採集遺物には、縄文式土器、磨製石斧、打製石斧、石匙、スクレイパー、石鏃などがある。特に、頂上部の果樹試験場の開場にあたっての造成工事では、押型文土器が出土している。広瀬川流域の中では、最も古い縄文時代遺跡として注目される。

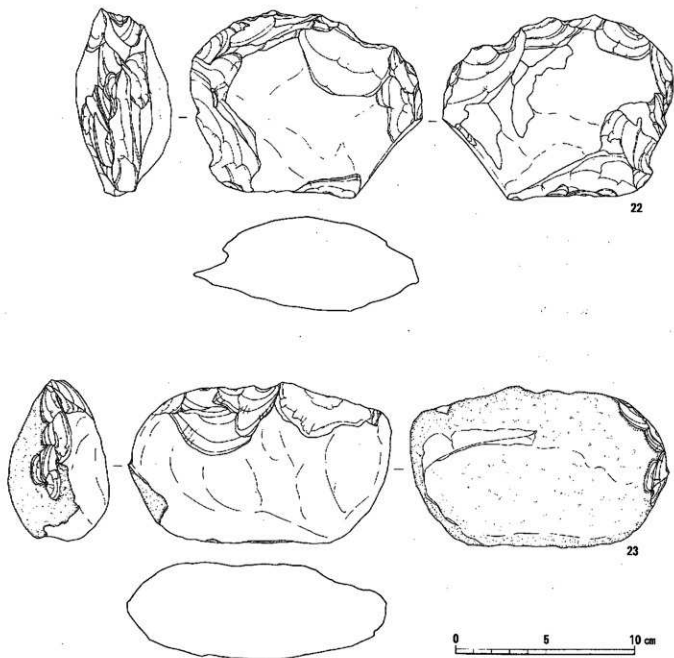
主な出土遺物は、¹⁰⁾第30, 31, 32図のとおりである。1～8は押型文土器である。厚手の土器で1.2～1.5cmの厚さの器壁を有する。胎土には、多量の砂粒を含んでいる。保存状態は不良で、表面の剥落が著しい。器形は破片からみて口が直にたちあがる円筒形。底部は存在しないが、たぶん平底になるものであろう。9は礫石器で、頁岩の自然礫の一辺に剥離を加えて刃部を作り出している。10, 11は、打製石斧である。10は、安山岩の棒状の自然礫の一端に両側より剥離を加えて刃部を形成する。長さ12cm、幅6cm、厚さ3.7cmを測る。11は、基部を欠損している。12は、局部磨製石斧である。偏平な砂岩の川原石の一辺に打つ欠きによって刃をつけたのち、刃部を研磨している。13は、頁岩の棒状の自然礫の一端に両側より剥離を加え刃部を形成する。片面は礫面を残し、片面は礫面を側面より打ち欠いて調整している。長さ10cm、幅5cm、厚さ3cmを測る。14は、頁岩の棒状の自然礫を用いているが、全体の2/3を欠損している。両面の刃部は、丁寧な研磨を施している。15, 16は、使用痕のある剥片で安山岩である。17, 18, 19は、石鏃である。17は、黒曜石製で完形品である。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測り、形状は角張った二等辺三角形で基部は平基である。18は、黒曜石製で右脚部の一部を欠損する。長さ2.2、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測り、形状は二等辺三角形で基部はU字状に挟れる。19は、チャート製で先端部を欠損する。長さ不明で幅2.1cm、厚さ0.4cmを測り、形状は二等辺三角形で基部はU字状に挟れる。20は、安山岩製で完形品の石鏃である。長さ4.5cm、幅3.1cm、厚さ1.2cmを測りかなり大型の石鏃で形状は二等辺三角形呈し基部は平基である。21は、頂上部付近より出土した勾玉で、第5集茂木根横穴群確認調査報告書に収録している。



第31圖 丸尾ヶ丘遺跡出土遺物 土器 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
石器 9, 10, 11, 12



第32図 丸尾ヶ丘遺跡出土遺物 石器13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20
 勾玉21



第33図 丸尾ヶ丘遺跡出土遺物 石器22, 23

22, 23は、礫器である。22は、泥岩製のチョツピングツールで両側より剥離を加え刃部を形成する。長さ9.9cm、幅12.9cm、厚さ5.2cmを測る。23は、泥岩製のチョツパーで礫の片面より剥離を加え刃部を形成している。長さ8.7cm、幅14.5cm、厚さ5.5cmを測る。なお、22, 23は、金沢武昌氏所蔵の資料であるが、昭和30年代に現在のホームセンターサンコーの北西部で、焼物の土を採土中に宗像武彦氏によって発見され金沢氏が所有されてきたものである。この他、若干の剥片も所有されている。宗像氏によると、同じような石器が赤褐色粘土中より他にも出土したとのことである。この他、昭和57年には熊本県立天草農業高校（現在芥明高校）の実習園茶畑でも熊本県教育庁文化課による試掘調査（担当平岡勝昭氏）が実施され、石鏃が出土している。これらのことより、丸尾ヶ丘遺跡は頂上から斜面、なだらかな平地にかけての丘陵全体に広がっていると理解される。

4 むすび

発掘調査の結果、菅原遺跡では遺物包含層より土器と石器を検出した。また、褐色粘土層に掘り込む土壌を検出した。土器は、縄文時代早期の遺物と考えられる。この他に、土師器に属する遺物が出土しているが詳細は不明である。石器は、旧石器時代の削器と観察される石器が1点出土した。主体は、縄文時代早期の磨石・敲石と台石・石皿や石鏃である。

菅原遺跡では、テフラ分析を実施している。天草の土層は、残存状態が悪く良好な分析結果を得られにくい。各地で資料の収集につとめることは、基礎資料の収集であり今後必要なことと考えている。基礎資料の集積は、天草島内の遺跡の比較と基本土層を作成する上で最も重要な作業であろう。特に、菅原遺跡では混雑褐色粘土層に遺物が出土しており、風化の進んだ石器が出土している。今回の分析結果を、今後の調査に反映させたい。

引用・参考文献

- 1) 平成7年度国勢調査速報による
 - 2) 山崎純男 1991『本渡市史』「第1章 原始・古代」本渡市
 - 3) 木崎康弘氏の教示による
 - 4) 天草考古の会踏査結果、熊本県遺跡台帳をもとに作成
 - 5) 古森政次氏の観察教示による。実測図も同氏による。
 - 6) 山崎純男 1991『本渡市史』「第1章 原始・古代」本渡市
松舟博満 1989『椎ノ木崎遺跡試掘調査報告書』「付録内の原遺跡」牛深市教育委員会
江本直, 木崎康弘, 古森政次 1985『肥後考古』第5号 熊本の旧石器文化 肥後考古学会
木崎康弘 1991『肥後考古』第8号 交流の考古学 肥後考古学会
甲元真之 1990『宮崎石棺群』「倉岳町の遺跡」宮崎石棺群調査団
古森政次 1996『肥後考古』第9号「天草の旧石器」肥後考古学会
 - 7) 木崎康弘 1987『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告第90集
 - 8) 宮坂孝宏 1993『白鳥A遺跡』熊本県文化財調査報告第127集
 - 9) 2) に同じ
 - 10) 31 図2) より引用, 32 図歴史民俗資料館所有, 33 図金沢武昌氏所有
- 木崎康弘 1986『大丸・藤の迫遺跡』熊本県文化財調査報告第80集
江本直 1986『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第81集
山崎純男・小畑弘巳『柏原遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集
花岡興輝ほか 1984『苓北町史』「第2章 原始・古代」苓北町
島津義昭 1987『松島町史』「第2章 原始・原史」松島町
鶴田倉造 1960『天草史談会報』2『本渡周辺の先史遺跡』
山崎純男 1969『歴史の海』「熊本県本渡市広瀬川流域の縄文遺跡」
山崎純男 1972『熊本史学』第40号「天草地方の始源文化の一側面」
坂本経典・経昌 1971『古代の天草』

菅原遺跡テフラ分析調査

早田 勉(株式会社 古蹟地研究所)

1. はじめに

九州地方には、阿蘇カルデラや蛤良カルデラなど南九州や中九州の火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が広く分布している。これらのテフラの多くについては、すでに噴出年代が明らかにされており、層位関係を求めることによって遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。天草地域ではこれらのテフラのほか、平成の雲仙普賢岳の噴火の際に降灰が認められたように、雲仙火山起源のテフラの検出も期待される。

そこで良好な土層断面が認められた菅原遺跡において、地質調査とテフラ組成分析さらに屈折率測定を合わせて行い、過去の年代や空間の指標となる示標テフラの層位を明らかにして、遺跡の土層の形成年代に関する資料を得ることになった。調査の対象となった地点は、東壁面である。

2. 土層の層序

東壁面では、下位より黄色がかった褐色粘質土(層厚17cm, II層)、礫混じり赤色がかった褐色粘質土(層厚12cm, II b層)、赤色がかった褐色粘質土(層厚12cm, II a層)、黄褐色粘質土(層厚15cm, I層)、灰色表土(層厚5cm)が認められる(図1)。発掘調査では、これらの土層のうちII b層からI層にかけて石器、I層と表土の間の層準から押型文土器に属する土器が検出されている。

3. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

東壁面において、基本的に5cmごとに採取された試料のうち5cmおきの試料、合計6点を対象に火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。テフラ組成分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料30gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 250粒子について、偏光顕微鏡下で火山ガラスの形態別比率を求める(火山ガラス比分析)。
- 6) 重鉱物250粒子について、偏光顕微鏡下で重鉱物組成を求める(重鉱物組成分析)。

(2) 分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図2に示す。また火山ガラス比の内訳を表1に、重鉱物組成の内訳を表2に各々示す。全体として火山ガラスの比率は、非常に小さい。ただしその中でも試料番号1にわずかに多くの淡褐色(0.8%)や褐色(0.4%)、さらに透明(0.4%)の平板状のいわゆるパブル型ガラスが認められる。

一方重鉱物組成では、試料番号1に最も多くの磁鉄鉱以外の重鉱物が含まれている。試料番号1に含

まれる重鉱物は、量の多い順に磁鉄鉱 (70.0%)、斜方輝石 (20.4%)、単斜輝石 (5.2%)、角閃石 (2.8%) である。

火山ガラスの量が少ないために明確に述べることはできないが、ほかの試料と比較して若干ガラスが多いこと、またこの層準のみに褐色のバブル型ガラスが認められたこと、さらに重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が多く含まれていることなどから、試料番号1付近に褐色バブル型ガラスや斜方輝石および単斜輝石などで特徴づけられるテフラの降灰層準が考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料番号1に含まれる火山ガラスについて、屈折率測定を行い示標テフラとの同定を行った。屈折率の測定は、位相差法 (新井, 1972) による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果、火山ガラス (n) の range について 1.499-1.513 の値が得られた。ただし mode をみるとこの値は、1.499-1.501 と 1.508-1.513 の2種類の火山ガラスの存在がわかる。前者は、その値から約 2.2-2.5 万年前に鹿児島湾の一部にあたる始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992) であると考えられる。また後者は、約 6,300 年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 町田・新井, 1978) に由来するものと考えられる。両示標テフラの特徴から、おそらく透明のバブル型の大部分は前者に、透明なバブル型ガラスの一部および淡褐色や褐色のバブル型ガラスは後者に各々由来している可能性が大きいと考えられる。つまり、試料番号1は K-Ah の粒子の多いことが予想される。また試料番号1に斜方輝石や単斜輝石の多いことは、試料中にこの K-Ah の粒子が多く含まれる推定と矛盾しない。したがって試料番号1付近に K-Ah の降灰層準のある可能性が大きいと考えられる。

以上の結果、菅原遺跡における石器や押型土器は、K-Ah の下位より検出されている可能性が大きいものと考えられる。

5. まとめ

菅原遺跡において地質調査、7フッ組成分析、さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.2-2.5 万年前) や鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約 6,300 年前) に由来する火山ガラスが検出された。火山ガラスの比率、重鉱物の組み合わせや量比傾向などから、表土中に K-Ah の降灰層準のある可能性が考えられた。今回の分析結果は、今後の地質調査やテフラ分析の継続により、テフラの降灰層準と遺物の層位関係に関する資料が蓄積され、天草地域における旧石器時代から縄文時代にかけての詳細な編年研究も可能であることを示唆している。

文 献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

- 荒牧重雄 (1969) 鹿児島県分地域地質と火砕流堆積物. 地質雑, 75, p.205-222.
- 小林哲夫 (1986) 桜島火山の形成史と火砕流. 文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(研究代表者 荒牧重雄), p.137-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-鬼界アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.243-263.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

表1 普原遺跡東壁面の火山ガラス比分析結果

試料	bw (Tr)	bw (Pb)	bw (Br)	md	pm	その他	合計
1	1	2	1	0	0	246	250
3	3	0	0	0	0	247	250
5	0	1	0	1	0	248	250
7	1	0	0	0	0	249	250
9	0	0	0	0	0	250	250
11	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型. Tr: 無色透明, Pb: 淡褐色, Br: 褐色.

表2 普原遺跡東壁面の重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他
1	0	51	13	7	0	175	4
3	0	25	3	4	0	216	2
5	0	9	0	10	0	227	4
7	0	10	0	4	0	229	7
9	0	6	0	3	0	239	2
11	0	2	0	1	0	244	3

数字は粒子数. ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, bi: 黒雲母, mt: 磁鉄鉱.

表3 普原遺跡の屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラスの屈折率 (n)	
		range	mode
東壁面	1	1.499-1.513	1.499-1.501, 1.508-1.513

屈折率の測定は, 位相差法 (新井, 1972) による.

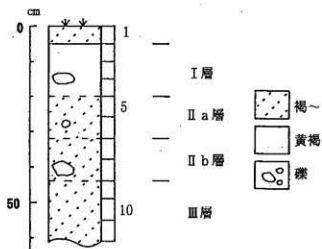


図1 菅原遺跡東壁面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

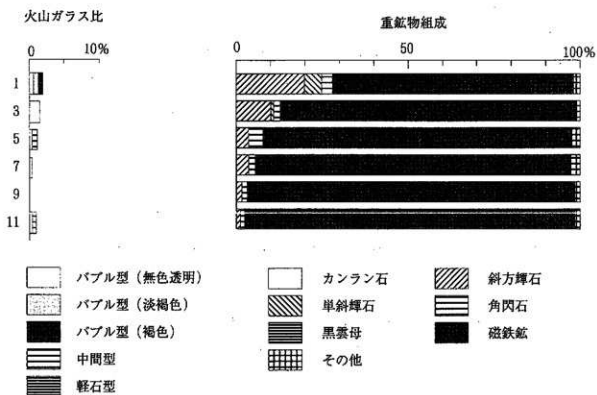


図2 本波市菅原遺跡東壁面のテフラ組成ダイヤグラム

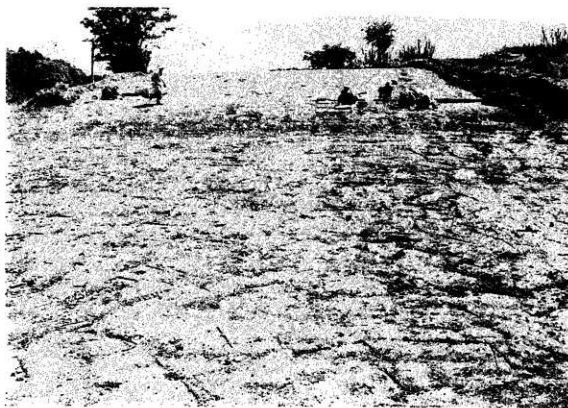
報 告 書 抄 録

書 名	菅原遺跡
副 書 名	平成6年度 市道井籠～箱の水線道路改良工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	熊本県本渡市文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第7集
編 著 者 名	平田豊弘
編 集 機 関	熊本県本渡市教育委員会
所 在 地	〒863 熊本県本渡市東浜町8番1号
発 行 年 月 日	西暦1996年3月29日

所収遺跡名	所 在 地	コード	調査期間	調査面積	調査原因
菅原遺跡	本渡市本渡町大字本戸馬場 字菅原1706-1		19940517 19941017	1,250㎡ 発掘面積 780㎡	道路工事

主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
縄文時代早期	土壇13基	碟器、磨石、敲石、台石 石皿、石鏝、石斧	祭礼石器2

圖 版



第1図版

○遺跡遠景（上） ○表土はぎ作業（下）
平成8年2月 平成6年5月



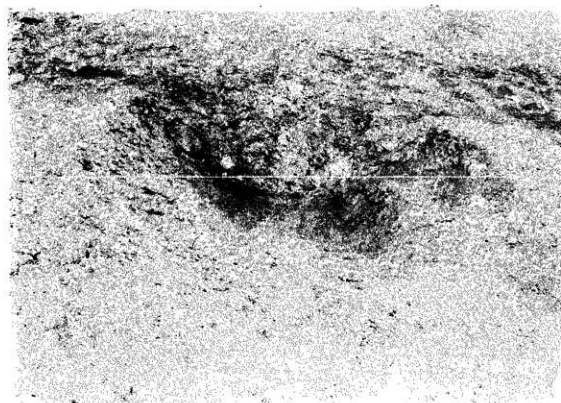
第2 図版

○発掘状況（上） ○1区上層観察状況（下）



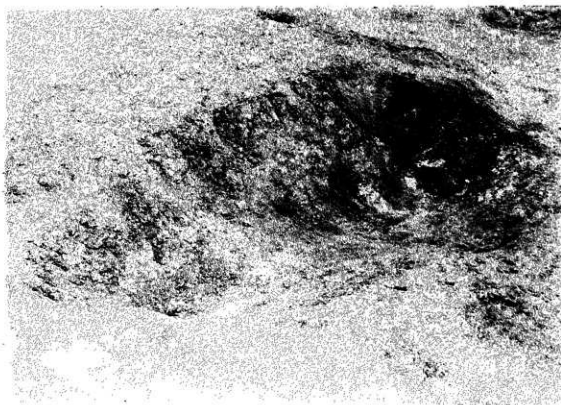
第3図版

○2区土層觀察狀況(上) ○発掘終了狀況(下)



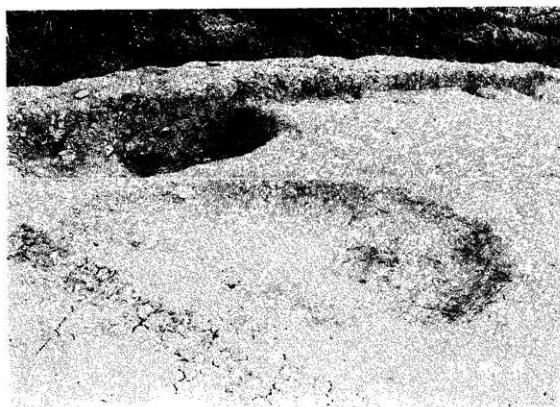
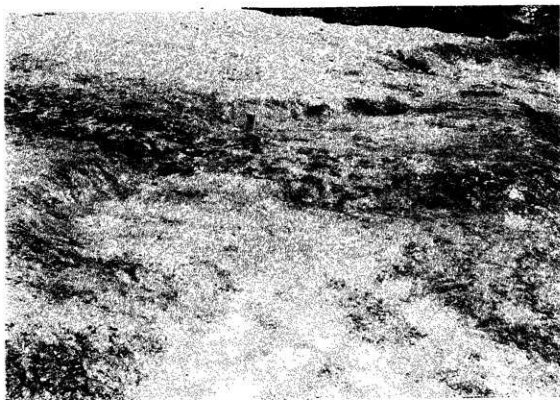
第4図版

○遺構SX1(上) ○遺構SX3(F)



第5 図版

○遺構SX4 (上) ○遺構SX5 (下)



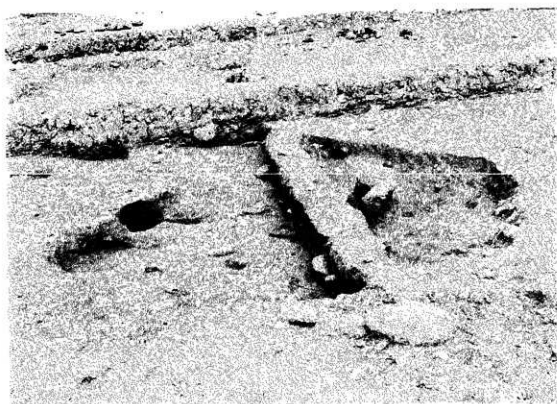
第6図版

○遺構SX6(上) ○遺構SX7(下)



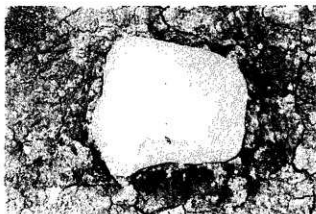
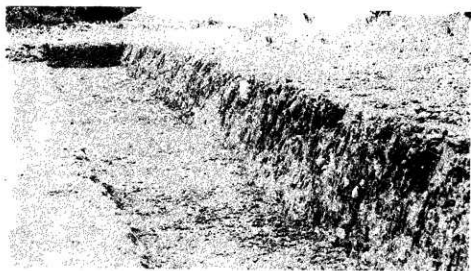
第7図版

○遺構SX8(上) ○遺構SX9・10(下)



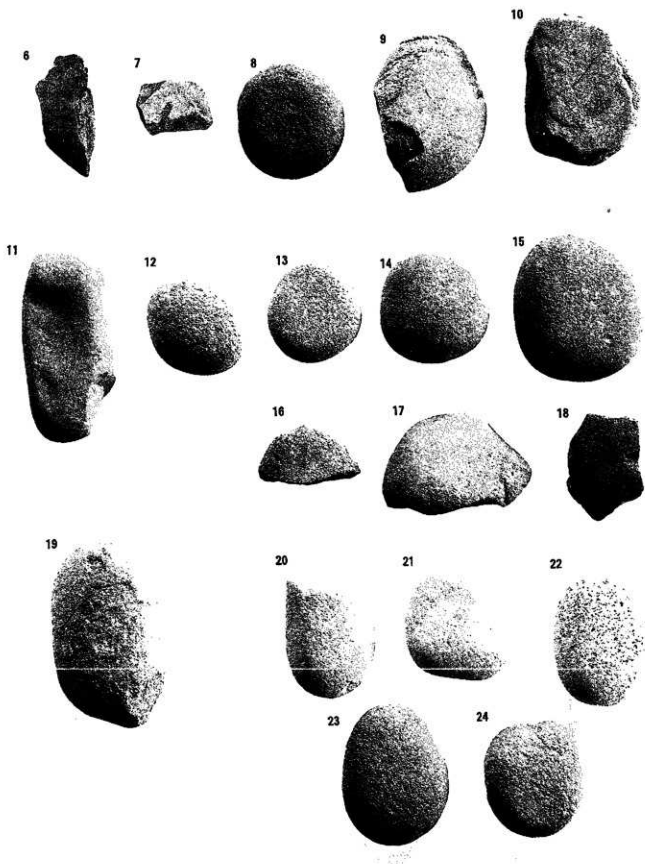
第8圖版

○遺構S X11・12・13(上) ○遺構S X12(F)



第9図版

- ・1区 褐色泥礫粘土層狀況(上)
- ・2区 礫層確認狀況(中)
- ・探検出狀況(下左) ・遺物出土狀況(下右)



第10 図版

縄文時代の石器

- ・動物の糞り痕のある石器 6, 7
- ・磨石 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18
- ・磨石・白石 19
- ・磨石・蔽石 20, 21, 22, 23, 24

25



26



27



30



28



29



31



32



33



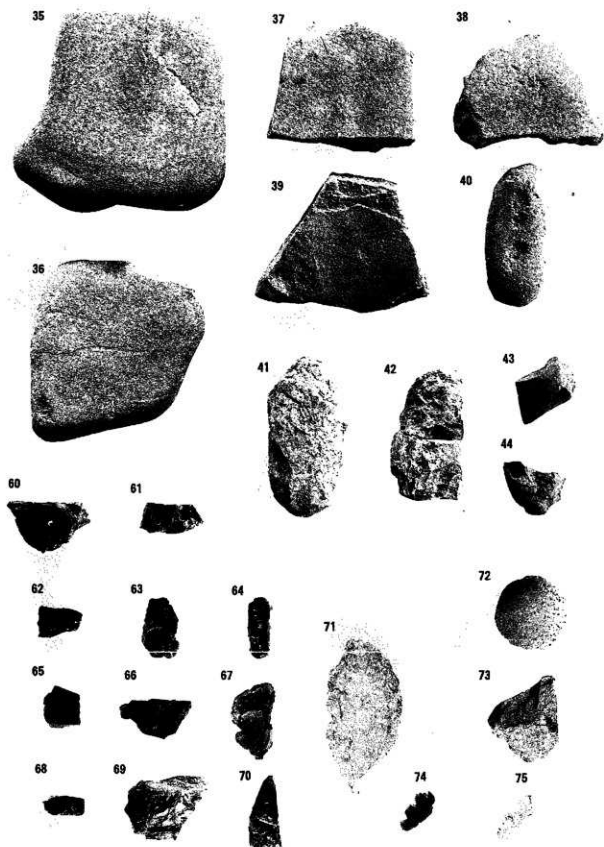
34



第 11 図版

縄文時代の石器

- ・ 敲石 25, 26, 27
- ・ 台石 28, 29, 30, 31
- ・ 石皿 32, 33, 34



第12図版

縄文時代の石器

- ・石皿 35, 36, 37, 38, 39
- ・石斧 41, 42, 43, 44
- ・剥片石器 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71
- ・凹石 40
- ・石核 60
- ・その他の石器 72, 73, 74, 75

あ と が き

本渡市文化財調査報告書第7集として、市道井籠～箱の水線道路改良工事に伴い発掘調査を実施しました「菅原遺跡」の調査報告書を発行いたします。近年、本渡市内におきましても大規模な開発事業や土地改良事業、区画整理事業、宅地造成が計画・実施されております。開発行為等に先だち、埋蔵文化財の調査は義務づけられております。今回の調査は、菅原遺跡が平成6年度の道路改良工事により影響を受ける区域について発掘調査し、記録としてまとめたものです。今後、開発と文化財保存の調整につきましては、関係各位の一層のご理解をお願いします。

最後に、発掘調査から遺物整理、実測、報告書作成と、ご協力とご指導賜りました多くの方々に感謝とお礼を申し上げます。

熊本県本渡市教育委員会
文 化 課

熊本県本渡市文化財調査報告書 第7集

菅原遺跡調査報告書

(平成6年度 市造井籠一箱の水線道路改良
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)

発行/平成8年3月29日

発行者/熊本県本渡市教育委員会

〒863 熊本県本渡市東浜町8番1号

☎(0969) 23-1111

印刷/有限会社 天草民報社